

世界代表司教会議（シノドス）
第16回通常総会に向けてのアンケート

- －「交わりとしての教会をめざして」歩んできた
横浜教区の20余年を振り返って－

2022年5月

世界代表司教会議（シノドス）

第 16 回通常総会に向けてのアンケート

目次

「シノドスアンケートのお願い」	2
意見聴取に参加する皆さんへの質問票（参考）	4
神奈川第一地区	6
神奈川第二地区	10
神奈川第三地区	18
神奈川第四地区	22
神奈川第五地区	26
神奈川第六地区	38
神奈川第七地区	40
静岡静清地区	44
静岡志太榛原地区	47
静岡西部地区	50
長野北信地区	55
長野東信地区	57
長野南信地区	59
山梨地区	61

2022年2月

地区共同宣教司牧委員会の皆様

横浜教区宣教司牧評議会 宮内 毅

横浜教区事務局長 保久 要

シノドスアンケートのお願い

†主の平和

2023年10月に開催される世界代表司教会議第16回通常総会（第16回シノドス）は、2021年10月から約2年をかけて準備を進めることになっています。その第一段階は各地方教会において聞き取りと対話を行うこととされ、そのための「手引書」と「質問票」がシノドス事務局より送られてきています。日本の教会は、この質問に対する回答を各教区でまとめ、2022年6月4日までに中央協議会に送付することになっています。

今回のシノドスのテーマは「ともに歩む教会のため——交わり、参加、そして宣教」ですが、このテーマ自体はすでにわたしたち横浜教区の目指してきたもので、司牧書簡『交わりとしての教会をめざして』（2000年12月25日）で触られています。そこで、当教区としましては「質問票」のそれぞれにこたえるのではなく、司牧書簡から二十余年がたった今、交わりとしての教会がどのように理解され、深められ、実現したかを振り返り、今後に生かす機会としたいと思います。そのための教区としてのアンケートを作成いたしましたので、各地区で皆様のご意見をまとめ、5月中旬をめぐり、教区本部までお送りいただけますよう、お願い申し上げます。よろしくお願いいたします。

以上

世界代表司教会議（シノドス）第 16 回通常総会に向けてのアンケート ー「交わりとしての教会をめざして」歩んできた横浜教区の 20 余年を振り返ってー

（p.は司牧書簡『交わりとしての教会をめざして』のページ数、質問票は改訂版 A）

1. 交わりの諸次元はどの程度深まってきたか?（質問票 1～4 も考慮して）

1) 諸教会の交わり（pp.6-7）

①外国籍信徒の交わり

Q1. 外国籍の信徒、そして外国語コミュニティとの交わりはどのように変化してきたでしょうか。それらの方々が、教会の一員として典礼やその他の教会活動に参加できるようになってきているでしょうか。

②エキュメニズムの促進（質問票 7）

Q2. キリスト教の他教派の教会との交わりは深まってきたでしょうか。それぞれの地域において、カトリック以外のキリスト教会と祈りや活動を共にする機会が大切にされてきたでしょうか。

2) 聖職位階の交わり（pp.8-9）

Q3. 司祭団は交わりと協働を持って、聖職者中心主義、小教区中心主義からの脱却を図ってきましたか。

3) すべての信者の交わり（pp.9-15、質問票 5, 6, 8, 9）

a) 共同宣教司牧について

＜横浜教区は「聖職者中心主義」から脱却し、すべての信者、すなわち信徒・修道者・司祭の三者が交わりのうちに協力して働く「共同宣教司牧」を目指してきました。＞

Q4. この 20 年以上にわたる歩みの中で、信徒・修道者・司祭の交わりは深まってきたでしょうか。そして、この三者が協働して神の国の実現を目指すという意識は高まってきたでしょうか。

b) 「地区共同宣教司牧委員会」と「三部門」について

＜共同宣教司牧を推進するため、また「小教区中心主義」からの脱却を目指して、横浜教区では 16 あるすべての地区に「地区共同宣教司牧委員会」が置かれ、また教会にとって欠かせない三つの使命を果たしていくために各地区に「三部門」が設置されました。＞

Q5. これまでの地区共同宣教司牧委員会の歩みを通して、小教区中心主義を乗り越えられてきたでしょうか。「地区」として共に歩む意識は深まってきたでしょうか。

Q6. 三部門の営みによって、社会に向けて「祈る力」「信仰を伝える力」「神の愛を証しする力」は育ってきたでしょうか。祈り、伝え、証しする使命を神からいただいて派遣されているという意識は深まってきたでしょうか。

2. 交わりとしての教会をめざして、今後何が求められるか。（質問票 10）

以上

世界代表司教会議 第16回通常総会

ともに歩む教会のため—交わり、参加、そして宣教

2021年9月7日発表の「準備文書」より抜粋 改訂版A

＜意見聴取に参加する皆さんへの質問票＞

1. 旅の同伴者

皆さんの教会で、「わたしたちの教会」というとき、誰がその仲間でしょうか。逆に、どういう人、またはグループが、教会の周縁部に取り残されているのでしょうか。

2. 聴くこと

教会の内部で、また教会外の人々と、わたしたちの教会は、それぞれ誰に対し「耳を傾ける」必要があるのでしょうか。何が、耳を傾ける助けと妨げとなるでしょう。

3. 声に出すこと

わたしたちの生活の中で、また地域社会やその団体の中で、福音の価値を公に伝える場面がありますか。そのために、何が助けと妨げになるのでしょうか。社会に対して、誰が教会を代表して発言しますか。

4. 祝うこと

祈りと典礼において、信徒を含め、信者全体はどのように参加しているのでしょうか。参加は進んでいるのでしょうか、後退しているのでしょうか。

5. 宣教における共同責任

皆さんの教会では、信仰教育や、社会での奉仕活動の計画は、だれが、どのように決定しているのでしょうか。だれが担っているのでしょうか。その人たちはどのように選ばれ、どんな養成を受けていますか。それ以外の人たちは彼らを十分に支援していますか。

6. 教会と社会における対話

わたしたちの教会で、そのビジョンや方針はどのように話し合われ、決められていますか。近隣の教区、地域の修道会、信徒団体などと、どのような対話と協力をしているのでしょうか。信者以外の一般の人々と、どういった対話、協力の経験があり、彼らからどのように学んでいますか。

7. 他のキリスト教諸派とともに

皆さんの教会の周辺で、他のキリスト教諸派の兄弟姉妹とどのような関係性をもっていますか。どういった分野に彼らに関心があるのでしょうか。彼らとの対話の実りと妨げはなんでしょうか。

8. 権威と参加

教会や教区の目標、その達成のための方法、踏むべき段階は、誰が、どのように決定していますか。チームワークと共同責任は、どう実践されているでしょう。信徒の参加はどうでしょう。教区レベルで、共同決定・共同責任を実践する機関はありますか。その実りと妨げはなんでしょう。

9. 識別することと決断すること

教会での決定の中で、どのような手順と方法で、わたしたちは共同で識別し、決定を下すでしょうか。どうすれば、それらは改善できるでしょうか。透明性と説明責任を、どのように促進できるでしょうか。

10. シノダリティの中で自己形成すること

教会の中で責任ある役割を担っている人々が、互いに耳を傾け合い対話しながら、「ともに旅をする」教会がさらに成長し、共同で識別と決断できるようになるため、わたしたちはどのような養成ができるでしょうか。何が妨げになるでしょうか。

神奈川第一地区 シノドスに向けた教区の質問票への回答

小教区(略記号)： 浅田(浅)、貝塚(貝)、鹿島田(鹿)、中原(中)、溝ノ口(溝)

Q1. 外国籍の信徒、そして外国語コミュニティとの交わりはどのように変化してきたでしょうか。それらの方々が、教会の一員として典礼やその他の教会活動に参加できるようになってきているでしょうか。

A1：

(溝) アナウンス (毎週の日曜日)、朗読 (月 1 回～2 回)、主の祈り (主日ミサ)、お知らせ (毎週の日曜日、はがき、ウェブサイト、看板)、生活支援等、上記の項目がベトナム語で対応されていますので教会活動にしっかり参加できるようになっております。(ベトナム人信徒の意見)

(中) 教会学校内ではリーダー、子供達、保護者の間で外国籍信徒とも交わりを持てている。それ以外では個別に外国籍の信徒と交わりを持てている人もいるが、コロナ禍による教会活動の自粛等も追い打ちを受けており、まだまだ、小教区全体としての国籍を問わない交わりが不足している。また、教会委員会のメンバーに外国籍信徒がいないので、受け入れの対応を検討している。

(浅) 浅田では、国籍ではなく、文化、教育、家庭の面で地域と違う経歴をもってきた信徒との交わりを大切にきて来ました。他の教会に籍がある人でも、ミサに参加された後は、自己紹介をしてもらっています。転籍の人は勿論です。母語が日本語とは違う方には、それぞれの言葉で簡単な挨拶をするように心がけています。日本に働きに来て家族が本国にいる信徒には、時々家族の様子をたずねるようにしています。ミサに参加される信徒の母数が 20 名から 30 名ですのでコミュニティはひとつです。この取組は、主任司祭が長らくブラド会の神父であった事もあり定着しています。その司祭の一人は本人が移民の子どもとしてフランスで生まれ育ったために、堪能なくつかの国の言葉を使い、ミサ後の声掛け、雑談に興じていたことも外国籍信徒の交わりが深められた一因でした。これからも、その伝統を守りつづけて行きたいと思います。

(貝) 教会活動はむしろ日本人信徒以外の方が積極的と感じられるが、日本籍、外国籍に関わらず「教会のために動ける人」はごく限られており、全員で支えるという雰囲気はできていない印象である。コロナ禍となり、人が集まりにくくなったことによってさらにその傾向が強くなったと感じられる。また、多言語での典礼、会議、意思疎通は労力と時間がかかるため、多言語での情報発信、意思疎通に関して教区からの助言があるとありがたい。

言葉の壁の問題に関しては、日本語か英語を使える外国籍信徒も多いので、外国籍信徒を含む教会委員会の運営は可能となっている。それぞれの言語の信徒のグループ活動だけでなく、さらに複数の言語を含むグループが共通目的のグループを形成する可能性も今後期待される。例えば、音楽のようなものを目的とする多言語グループは可能性があるが、グループをまとめるまとめ役が必要である。

(鹿) コロナ前は外国籍の信者の為に英語ミサ、ミサ終了後交流会を開催。外国籍の信者の為にベトナム語、タガログ、スペイン語朗読。アフリカの子供たちへの支援、ボリビアの子供達への支援の協力。外国籍の信徒が教会委員会のメンバーに入り、国籍を超えた交流が生まれていると思う。

Q2. キリスト教の他教派の教会との交わりは深まってきたでしょうか。それぞれの地域において、カト

リック以外のキリスト教会と祈りや活動を共にする機会が大切にされてきたでしょうか。

A2:

(溝) 残念ながら全くと言っていいほど他教派の教会との交わりは無い。今後の課題です。

(中) 以前はキリスト教一致週間に聖公会の教会を訪問したりしていたが、現在はコロナ禍のこともあり、できていない。(コロナがもう少し収まったら、再開したい。)

(中) エキュメニズムを最初から教派、地域で捉えていることに違和感を感じる。家庭内に未受洗者がいて子

供が他宗教の人と結婚する可能性があるなど、もっと切実な問題があると思う。

(浅) エキュメニズムとは直接結びつかないかもしれませんが、2018年に大正大学の高瀬助教の実施していた川崎市内の宗教施設を対象としたインタビュー調査に協力しました。宗教施設が地域の発展の社会的資源となるため、なにが必要(どんな条件があったらよいか)の調査でした。具体的には行政、社協、NPOなどの期間との連携などが質問事項にありました。この調査にこたえ、他の宗教施設の取組にふれることで地域に生きる教会の意義をあらためて振り返ることが出来ました。

(貝) コロナ禍以前にはキリスト教一致祈祷週間でプロテスタントの教会を招いたり、市民クリスマスや貧しい人、問題を抱えた人々の会などでの交流があったが、コロナ禍以降、交流が困難になっている。貝塚教会では船員を訪ねる企画や貧しい人々に食品を提供する活動において、カトリック以外の人が参加するようになっている。

(鹿) 前主任司祭の時に主任司祭が交流を行っていたという話を聞いているが、信徒間の交流はなかった。近隣でプロテスタントの集まりがあるという話もあるが、現状は他教派との交わりはなく、今後の課題。

Q3. 司祭団は交わりと協働を持って、聖職者中心主義、小教区中心主義からの脱却を図ってきましたか。

A3:

(溝) 同地区内の近隣教会と協力してミサの司式ができるようミサ時間を変更することになったが混乱なく変更できたところから判断して小教区中心主義からの脱却は図れていると思う。

(貝、中、鹿) 第1部門～第3部門や共同宣教司牧委員会は5つの小教区が合同で進めており、小教区中心主義からの脱却に寄与していると思われる。また、以前に比べて信徒がそれぞれの役割をもって直接神と交わることが強調され、聖職者中心主義からの脱却に寄与していると思われる。

Q4. この20年以上にわたる歩みの中で、信徒・修道者・司祭の交わりは深まってきたでしょうか。そして、この三者が協働して神の国の実現を目指すという意識は高まってきたでしょうか。

A:

(溝) キリスト教入門講座など司祭、修道者に頼っている状況です。信徒の努力、意識改革が必要と思われます。これもQ2同様、今後の課題です。

(中) 司祭は一小教区以外の仕事も多く、信徒の側も現代社会に於いて多忙な方々が多いため、時間的な制約も多く、交わりの時間が少なくなっており、更にコロナ禍が追い打ちをかけている。教区懇談会、地区懇談会、地区共同宣教司牧委員会、地区の三部門の委員会、小教区内の委員会など各組織の構成メンバ

一と司祭との交わりは徐々に深まってきているが、それ以外の信徒と司祭、修道者との間の交わりを深めていく機会をもっと増やす必要がある。コロナ禍がもう少し収まれば、徐々に交わりの場を増やしていきたい。

(浅) 外国籍の主任司祭が長かったので、信仰の核心的な部分(祭儀の中心的な部分)以外は、黙想会の担当神父の選定から、聖書研究の進め方など信徒の意見、要望が尊重されてきた。事務、事業の面では、信徒の助言をもとに聖職者が決定するというやり方であった。修道者(何年も前から当教会に出入りするシスターはいなくなりましたが、)も協力して共同宣教司牧に協働、従事してきたと言えます。

(貝) 地域に修道者がいなくなっている状況で、「三者」を意識にくくなっていると思われる。20年以上にわたる歩みの中で考えれば、交わりは深まっていると思われるが、信徒と司祭の壁は取り払うのが難しく感じられる。教会委員会や他の委員会で司祭と意見を交わすことはあるが、「協同して神の国の実現を目指すという意識」が高まってきたかどうかは分からない。

(鹿) コロナ前はミサ後に信徒ホールで団らんする時間があり、司祭を含めて交流していた。コロナ禍により教会活動が制限される間は難しい状況にあった。現在はコロナも落ち着いてきており、主に教会委員会や教会の奉仕活動に積極的に携わるメンバー間の交わりは活動を通して積極的に行われている。また、降誕祭やご復活祭後のパーティが開けない代わりに、主任司祭企画によるクリスマスパロールづくりや第三部門企画によるミニバザーを開催する等、少しずつ交わりの場を増やしている。

Q5. これまでの地区共同宣教司牧委員会の歩みを通して、小教区中心主義を乗り越えられてきたでしょうか。「地区」として共に歩む意識は深まってきたでしょうか。

A:

(溝、鹿) 堅信式の準備、フォローアップを地区合同で協力し合って実施している。主日の集会祭儀について地区合同で協議し、式次第を作成した。一粒会大会の開催に向けて地区合同で取り組んでいる。聖週間の典礼を3つの教会ではあるが合同で行ったことが過去にある。

(中) 現時点に於いて、地区共同宣教司牧委員会の構成メンバーの間では深まっているものの、その他の信徒の意識は薄い。コロナ禍によって活動が一時停止した状態であった三部門の活動も一粒会大会実行委員会からの依頼によって役割を担うようになったため、これからは三部門を中心に一般信徒も巻き込んで地区としての意識を深められるよう促進していきたい。

(浅) 神奈川第一地区は、浅田教会だけでなく、外国籍の聖職者がほとんどを占める地区で、それぞれの国ごとの聖職者のつながりが強かったため、そのつながりに助けられてか、小教区を越えてのつながりが強かったように感じます。

(貝) 乗り越えるというところまではいっていない。堅信式を合同で行うことが習慣化しているので、そのことは地区の歩みを意識する機会になっている。また、一粒会大会の準備を進める中で、地区として共に歩む意識が深まってきていると思われる。

Q6. 三部門の営みによって、社会に向けて「祈る力」「信仰を伝える力」「神の愛を証しする力」は育ってきたでしょうか。祈り、伝え、証しする使命を神からいただいて派遣されているという意識は深まっ

てきたでしょうか。

A:

(溝)地区内の各小教区に各部門の担当者がいるようになり、育ちだしたという段階だと思います。

(中)三部門について一般信徒の認識が薄い。これからは一粒会大会の準備に向けて、三部門がそれぞれの役割を分担されているので、それらに対して一般信徒にもっと積極的に関わり持ってもらっていく中で、徐々に三部門の本質的な意味を理解していただけたらと考えます。

(浅) 地区共同宣教司牧委員会が開催されるようになり、2018年までは2ヶ月に1回の会議で、教会に欠かせない三つの使命は、三部門の委員会を設置することなく、話し合われ、果たして来ました。2018年に三部門の委員会が設けられ、それぞれ委員会に2名の委員を出すことが決まりましたが、浅田教会では難しい状況です。一方、当教会にはプラド会の神父はもとより、古くから社会運動にかかわってきた信徒、組合運動の専門的な信徒などは情報発信をつねに絶やさないで、社会に向けて、祈り・伝え・証する使命を神からいただいて派遣されているという意識は長い年月をかけて深まりつづけています。

(貝) 部門に参加して活動している人の中では、意識の深まりがあると思われるが、信徒全体の中では深まっているとは言い難い。三部門はそれぞれ独立した「力」である訳ではなく、相互に関連し、重なっている部分もあるので、3つの部門に分ける点について再考が必要かと思われる。

(鹿) 三部門を強調する教会組織への改革を行い、各部門の担当はそれぞれの使命を意識して活動するようになった。

以上

神奈川第2地区共同宣教司牧委員会 シノドスアンケート回答

2022年5月15日

世界代表司教会議（シノドス）第16回通常総会に向けてのアンケート
ー「交わりとしての教会をめざして」歩んできた横浜教区の20余年を振り返ってー

（p.は司牧書簡『交わりとしての教会をめざして』のページ数、質問票は改訂版A）

1. 交わりの諸次元はどの程度深まってきたか？（質問票1～4も考慮して）

1) 諸教会の交わり(pp.6-7)

①外国籍信徒の交わり

➤ Q1. 外国籍の信徒、そして外国語コミュニティとの交わりはどのように変化してきたでしょうか。それらの方々が、教会の一員として典礼やその他の教会活動に参加できるようになってきているでしょうか。

- ・外国籍の信徒は少数（現在はベトナム人が多い）である。
 - ・日本人と結婚して日本に長く定住している人は教会に同化しているが、他の多くには警戒感と遠慮が見られる。
 - ・その理由は彼ら自身にあり、彼らがそれを打ち明けない限り知ることは不可能である。自虐的に自分たちの小教区が悪いと責める必要はない。自然に接するのが一番で、あまり理想論に走ることは控えなければならない。
 - ・実際、外国籍の信徒から「騙された、利用された」という不快な思いをさせられたケースが多々あることも事実である。
- 鷺沼教会では、2020年3月まで、毎月第1日曜日の第2朗読は外国語で行っており、外国籍の信徒の方々がミサに参加し易い雰囲気を作っていました。これまでに約15か国語での朗読が行われましたが、コロナ禍のため、現在この企画は中断しております。たまに日本人の信徒が外国語で朗読することもありましたが、ほとんどは外国籍の信徒の方々に朗読して頂いておりました。また、当教会で外国籍の信徒の方々が受洗されたり受堅されるケースもありました。現在はコロナ禍で中断しておりますが、バザー等教会行事にも積極的に参加して頂いており、かつは信徒会役員として活躍して頂いた方もおられました。
- この10年間でインドネシア、中国籍の在籍信徒が増えている。地域に定住し、家族で教会に通っている人が多い。子どもは地域の学校に通っており言葉にも不自由しないので教会（と教会学校）にとけこんでいる。ここ数年は、教会学校の生徒は外国籍の子どもが殆ど。外国籍の在籍信徒は地区グループに所属し、連絡網や掃除当番等にも入り、教会活動に参加している。また、関連する議案があるときに教会委員会への出席をお願いしている。在籍外国籍信徒が連絡係になって、外国語ミサが行われるようになった。当教会に籍のない外国籍信徒が外国語のミサに与っている状況。年に1度、全コミュニティが与る国際ミサを挙げている。ミサ後はパーティーを開き、交流を深めている。
- 外国籍の信徒で教会の信徒として参加されている方もいらっしゃいます。当教会の所属信徒として教会の役員、奉仕活動にも参加しています。教会所属ではな

い外国籍信徒にも門戸は開いております。ただし日本語以外でのミサは行っておりません。

- ・第2地区の他教会では、いろいろ取り組んでいたようだが、当教会では外国籍の方がそれほど多くないせいか、英語やベトナム語のミサ案内冊子があるくらいか。ベトナム語は教会というよりも信徒個人の働きかけによるものだと思う。神学生がベトナムの方なので頼るところもあるが、コロナ禍から外国籍の方も減少。
 - ・子供がいたら、教会学校を通して親同士が交流することができる。
 - ・これまで外国籍信徒が少なかったこともあり、外国籍信徒に教会活動に積極的に参加してもらえるような準備が出来ていない。
 - ・当教会内（小教区）においては、外国籍信徒の数は多くない部類に属す。しかし、祈りの場であるミサや教会学校への参加はなるべく不便の無いように対応し参加意識を持ってもらう様に努力している。
 - ・藤が丘教会においては、外国籍の信徒はほとんどいない。土曜・日曜4回の主日ミサにおいて、数家族が来られているだけの状況である。聖書と典礼の英語版パンフレットは20部ほどを用意しているが、それで十分に足りてしまう人数しか来ていない。来られている外国人の方々との交わりは非常に限定的であったが、コロナ禍になってからは特に、他人との接触を避けているように見受けられる。教会活動や奉仕活動への外国人参加は特に制限を設けてはいないが、お互いにあまり積極的な交わりをもとうとする感じではないように感じる。
- 百合ヶ丘教会の立地と関係があるのかもしれませんが外国籍信徒の絶対数が多くありません。日曜学校に子供を入れている方もおられます。ベトナム人も数名おられ、溝ノ口教会でつくられているベトナム語の「聖書と典礼」を定期講読、ご利用いただけるようにしています。

②エキュメニズムの促進（質問票7）

02. キリスト教の他教派の教会との交わりは深まってきたでしょうか。それぞれの地域において、カトリック以外のキリスト教会と祈りや活動を共にする機会が大切にされてきたでしょうか。

- していない。近隣の教会（改革派）のグループの訪問を受けた際に、当該のことを話題にしたが今のところ全く反応がない。時を待つだけだ。
- エキュメニズムの促進ということでは、過去に、「横浜ハリストス正教会」、「山手聖公会教会」、「日本ユダヤ教団広尾シナゴーク」等を往訪、互いに理解を深めることを心掛けてきましたが、現在はコロナ禍のため行っておりません。また、キリスト教会の他の教派との交わりに関しては具体的な活動は現在行っておりません。
- 改宗者（転籍等）の連絡以外では交わりがない。キリスト教一致祈禱週間ミサの案内を掲示する程度。
- キリスト教一致祈禱週間に年1回鶴見区周辺のプロテスタント教会と交わりをもっています。（今年で40回開催）合同で祈りをおこなっております。
- ・近隣のルーテル藤が丘教会とは、バザー、BBQ等（？）での交流、牧師先生

の講演など行ってきたが、やはりコロナ禍でこの2年ほどはルーテル教会作成のクリスマスカードを教会で販売するくらいしか実施していない。

- ・ コロナ前、交流始まったところだったが、中断してしまった。
- ・ 先々代の主任司祭の期間にルーテル教会といくつかの信徒間交流があったが、現在は私が知る限りではその交流もクリスマスカード復活祭カードの購入だけになっている。
- ・ 当教会（小教区）は、コロナ禍以前は定期的に聖公会との交流を図り、共同でバーベキュー会などを開催しお互いを知り、「宗派はことなっても同じ神の国のために働くものとしての認識を深めてきた。
- ・ 藤が丘教会においては、近隣のルーテル藤が丘教会との交流を持っていたが、コロナ禍に入って中断してしまっている。2代前の主任司祭は積極的な交わりを作ろうと努力されていたが、先代の主任司祭は他教会との交わりには余り積極的ではなかった。主任司祭の考え次第で、他教会との交わりは簡単に失われてしまう。これは当教会だけでなく、先方の事情も同じなのではないかと思う。信徒同士がお互いの宗教観を共有し、常々交流しているという状況は、教会活動が活発に行われて、それに対する司祭の理解が必要。コロナ禍で教会活動自体が停滞する現在は、継続的な交わりを持ち続けていくことすら難しいとも感じた。

- 日本キリスト教団生田教会が建替えの際、日曜日の礼拝のため当教会の聖堂をお貸しました。その後当教会の建替えの資金作りとして先方でチャリティコンサートを企画していただき実施、ご寄付をいただきました。

2) 聖職位階の交わり (pp.8-9)

Q3. 司祭団は交わりと協働を持って、聖職者中心主義、小教区中心主義からの脱却を図ってきましたか。

- ・ ここで問題とされる「聖職者中心主義」「小教区中心主義」の定義がはっきりしていない。そのためある種の混乱が信徒の中に見られる。
- ・ 「聖職者中心主義」：要するにワンマン司祭を指すのであろう。イエス・キリストに由来する本来の「権威」から外れて、権威主義をもって自分のアイデンティティーの基盤としてしまう姿勢である。こうした歪みへの反動として一部の信徒は、司祭職（召命）と叙階の秘跡の意義がわからなくなってしまったようだ。さらにエキュメニズム運動が適切に理解されていないため、「万民司祭説」まで振りかざす始末である。「善き牧者」として一貫したリーダーシップをとる司祭が常に求められている。カトリック教会が本来の力を取り戻すために、バランスある司祭像、教会像を聖職者も信徒もしっかりつかんでいく必要がある。
- ・ 「小教区中心主義」：これもかなり誤解されている用語である。カトリック教会はミサ聖祭（エウカリスチア）を中心とした信仰共同体で、そこへの具体的な帰属意識がなければ教会は成り立たない。実際、次世代とのつながりが非常に希薄になっている実情は「教会崩壊」の予兆である。自分が所属している小教区（共同体）を誇りに思い、大事にし、存続を願って奉仕することを、司祭は常に呼びかけ励まさなければならない。そうしながら、近隣の「小教区」との連携・交流を大いに進めるべきである。自分本位で気に入る教会を渡り歩く、あるいは、気に入らないから安易に他の小教区に移ることが当たり前になるならば（都会に多い）、どうして信仰の恵みを育てることができようか。こうした誤解を避けるためにも「小教区中心主義」という表現ではなく、「閉鎖的な小教

区のありよう」とすべきであろう。

- 鷺沼教会においては、司祭方と信者間の協力体制はよく出来ていると思います。そしてそれぞれが自分の役割を果たして、教会のために尽くしてくれています。司祭方は、特に典礼において中心的な役割は果たし、それに対して信者の典礼係や香部屋係などが複数で司祭方を助けるために4回のミサの準備や進行など積極的にかかわって、交わりと協働をもって、しっかりと使命を果たしています。小教区中心主義の意味があまりよく分かりませんが、神奈川第二地区宣教司牧への協力や他教会との連携も必要だと感じていますが、まずは小教区としての鷺沼教会の中での連携と一致を何よりも大事にそして優先して、そこから福音宣教へとより広げていけたらと考えています。
- 小教区においては、司祭のトップダウンではなく、委員会や活動部会の代表者からなる教会委員会で話し合いを重ねて、目標や達成の手段を決定するようになった。
- 教会内の目標、達成のための方法は主任司祭-教会役員会(聖家族会)-教会内の各部各会-信徒総会の交わりの中で決定されてゆく流れにしている。教区内では宣教師牧委員会を通して部門ごとに交流をはかり、各小教区との連携を進めている。教会内で各部各会の奉仕活動に参加する人数が減り、固定されたメンバーに負担が増える。
- ・司祭団のことはよくわからないが、小教区中心主義からの脱却を図ろうとはしているのではないかと思います。
・当教会(小教区)においては、司祭と評議会との間で情報の共有がなされ、さらに意思決定の過程においても、協議が重要され、司祭による独断専行はない。他の小教区との交流は地区共同宣教司牧委員会を一つの柱とし、教区の方針と歩調をあわせて、小教区内活動に反映させている。一粒会活動もまた各小教区が共同して行うイベントであり、お互いが協力して、意思の疎通を図り同じ目的に向かって努力している。ただ、概して言えば、コロナ禍の現在本取組が十分とは言い難い。
・藤が丘教会においては、過去の反省を踏まえ、教会運営を協議していく評議会を設けており、主任司祭の考えと信徒の考えを擦り合わせる機会を1カ月に1回設けている。司祭の意見が絶対的に優先されることはなく、信徒の意見を出しながら、より良い方向で進めていけるようにしている。評議会を設けることで、信徒都合の勝手な活動も司祭に直接持ち込まれることもなくなり、司祭立場を守る盾としての働きも出来てきているように感じる。
- 教会の運営については司祭と運営委員会が緊密に連携しながら進めている。神奈川第2地区の共同宣教司牧委員会における情報交換は有用であるが、依然として小教区レベルでの活動が中心になっている。

3) すべての信者の交わり(pp.9-15、質問票 5, 6, 8, 9)

a) 共同宣教司牧について

<横浜教区は「聖職者中心主義」から脱却し、すべての信者、すなわち信徒・修道者・司祭の三者が交わりのうちに協力して働く「共同宣教司牧」を目指してきました。>

Q4. この20年以上にわたる歩みの中で、信徒・修道者・司祭の交わりは深まってきたでしょうか。そして、この三者が協働して神の国の実現を目指すという意識は高まってきたでしょうか。

- おおむね実現しつつあると思う。ただし「共同宣教司牧」というスローガンを一体どれくらいの信徒が実感として理解しているだろうか。2年経ってもほとんど理解されていない現実を直視すべきであろう。役所的な発想に基づく「言葉づかい」ではなく、下からの目線でスローガンを立て、丁寧に説明を繰り返すことがますます必要となっている。
- コロナ禍で、ミサが地域毎（川崎、横浜）に区分され、また、教会活動の大部分が中断されているため、この2年間は信徒間の交流が不足していると感じております。また、奉仕活動に参加するメンバーも固定化の傾向にあり、その面での不安もあります。特に、当然ながら若者の信徒は仕事や学業に中心を置いたため、教会活動への参加が減少しており、この点が今後の課題であります。
- 教区の委員会や共同宣教司牧サポートチーム神奈川が企画・開催する交流会や養成講座においては、三者の協働と交わりが徐々に深められてきたと思う。一方、小教区のミサや活動に修道者の参加がないので、三者の協働と交わりは出来ておらず、意識が高まったとは言えない状況。
- ミサ以外での奉仕活動に参加する信徒が減り、交わりの中で活動をする信徒が固定化されてきている。
- - ・ 司祭の個人的な要素が大きすぎて当教会では三者が一致して神の国の実現を目指そう、という意識は感じられなかった。小さな具体的な活動では、修道者の方々による信仰講座、ミサ奉仕等は身近にいつもあった。教会学校では、子どもの活動を通して、修道院や司祭との交流が増えた。
 - ・ 主任司祭が常時おられる当教会では危機感がなく感覚的に聖職者中心主義から脱却できないように思う。
 - ・ 当教会（小教区）での三者協働による神の国実現への歩みは、かなり育ちつつあったが、このコロナ禍により、様々な情報の共有が途絶えたといってもよく、情報のみならず意思の疎通までもが打ち砕かれたといってもよい。
 - ・ 藤が丘教会における修道者との交わりは、教会活動や典礼奉仕部分におけるシスターとの交わりが挙げられる。神学生も司牧実習に来られる機会が増えている。シスター、神学生の存在は、司祭とは異なる立場で神さまの計らいが現れる機会でもあり、司祭・修道者・神学生との交わりは、信仰共同体として欠かせないものになってきているが、個々の靈性に助けられているという部分が大きい。コロナ禍の各種教会活動の休止は、貴重な交わりの場を奪う結果となってしまっているのは残念。アフターコロナの教会活動にどう取り組むか、これからの課題と考えている。
- 教会内で信徒が果たすべき役割があることについての意識は徐々にではあるが高まっており、2018年から「信徒による入門講座」がスタートしている。ただ日曜日にごミサに来られる修道者がおられなくなってから修道者との接点が無くなっているのが現状。なお昨年の堅信式の準備の為に勉強会の指導はサレジアン・シスターズの修道女にお願いしました。

b) 「地区共同宣教司牧委員会」と「三部門」について

＜共同宣教司牧を推進するため、また「小教区中心主義」からの脱却を目指して、横浜教区では16あるすべての地区に「地区共同宣教司牧委員会」が置かれ、また教会にとって欠かせない三つの使命を果たしていくために各地区に「三部門」が設置されました。＞

Q5. これまでの地区共同宣教司牧委員会の歩みを通して、小教区中心主義を乗り越えられてきたのでしょうか。「地区」として共に歩む意識は深まってきたのでしょうか。

- 「地区」単位で考え行動することには慣れてきたと思う。しかし、それでも一部の人が限るため、浸透するにはまだまだ時間がかかるであろう。
- 以前には、「朗読の講習会」、「聖体奉仕の研修会」、「カテキスタの研修会」、「〈共同体として見送る〉をテーマとした宿泊交流会」等が行われて来ましたが、コロナ禍で教会活動に制約がある中、教区内では共同宣教司牧委員会を通して各部門毎に交流が図られていないというのが現状かと思います。但し、昨年の西村助祭の司祭叙階式に際しては、二地区各教会のご協力もあり、成功裏に執り行うことが出来、これは地区として共に歩む意識の深まりの一例であると思います。
- 信徒数が少ない小教区にとって、単独で行うことが難しい或いはマンネリに陥りやすい勉強会・活動を地区で一緒に行えること、地区というくくりの中で共に歩めることは、大変有難い。良い刺激を受け、視野も活動範囲も広がる。叙階式や一粒会大会を共に準備することで、地区としての連帯感と帰属意識が強まると感じる。
- 新型コロナウイルスの感染拡大による教会活動の制限があり、地区連携の意識の深まりは留まっている。
- ・地区共同宣教司牧委員会については、自分が事務局の一員となり、やっと存在が明確になった。委員会の議事録を教会誌に記載するようにして、一般信徒にも存在を知らせるようにしたが、大多数の信徒は「地区」の一員としての認識はないように思う。
・委員会の動きが見えにくい。そうなると共に歩む意識が芽生えてこない。
・私自身、信徒としての年月を重ねてきたが、教区、地区といった概念が希薄であったのは確かであったが、この教区にきて皆の意識に感化され、個人の祈りだけでなく教区に、ひいては社会に貢献できれば幸いと考えられるようになった（特に震災復興支援活動を通じて）。このように、徐々にではあるが、意識は深まってきていると考えていいものと思料。
・第2地区宣教司牧委員会の存在は、まだまだ信徒に浸透はしていないのが実情。事務局を務めた2年間にわたっては、なるべくその動きを信徒に伝えるように務めてきたが、地区における連帯感という部分はなかなか伝わりにくい。特に第2地区は横浜市北部にあたり、各教会間を通る主要道がなく、鉄道経路もつながっていない。お互いの教会の行き来も、複数回の乗り換えが発生する状況にあって、教会活動を連携させる取り組みがしにくいことは、地区というつながりの大きな阻害要因であると考えている。
- 地区として共に歩む意識は徐々にできつつあると思われますが、小教区中心主義

を乗り越えるレベルには達していないと思われます。

Q6. 三部門の営みによって、社会に向けて「祈る力」「信仰を伝える力」「神の愛を証しする力」は育ってきたでしょうか。祈り、伝え、証しする使命を神からいただいて派遣されているという意識は深まってきたでしょうか。

- ・ Q6 の設問に見られる「三部門」という表現に違和感を覚えるのは、本来の教会を何か企業体としてイメージしてしまっていることによる。なぜもっと適切な言葉遣いをしないのだろうか。元来、キリストの教会は「とらえがたい神秘的な生命体」であり、それは主に三つの側面をもっていると表現できるはずである。
 - ・ 信徒の心に響く言葉遣いに無頓着なのは、まさに「聖職者中心主義」のあらわれであろう。
- 以前は三部門の営みによって、社会に向けての「祈る力」、「信仰を伝える力」、「神の愛を証しする力」が育まれていたと思われますが、前述した通り、若者の教会活動への参画の減少、また、信徒の高齢化等三部門を担うべき人材の減少が懸念され、今後に向けてまだまだ解決すべき課題は多々あると思います。
- 内向きに留まり、「社会に向けて」には至っていないように感じる。教書に書かれている「自ら～する力を育てる」の「自ら」が、具体的に何を意味するのかよくわからない。
- 青年たちのミサ・教会活動への参加が増えていないのでまだまだ道半ばであるとの認識です。
- ・ 三部門については、理解されているとは思えない。一握りの信徒が取り組んでいるのではないか？
 - ・ 教区としての三部門の営みは震災復興活動や世界的な災禍に対する支援を通じて着実に意識が深まっているといえる。信仰を伝える力のもとになるのは信頼と位置付けキリスト教として社会に貢献する事こそ、我々の信仰のすばらしさを伝える一つの方法であると思料する。
 - ・ 「祈る力」「信仰を伝える力」「神の愛を証しする力」を目指した取り組みであるとは明確にされていないため、信仰共同体として意識の共有化はなされていない。典礼奉仕、宣教司牧、青少年育成奉仕の各奉仕活動であるが、そこに関わる信徒一人一人はほとんど意識していないのではないか。
- 地域に対して開かれた歓談の場を提供するという趣旨で「ゆりカフェ」(毎月第1・第3木曜日、午後1時半から3時半)が2016年にスタート、土曜版の「土曜サロン」も現在はコロナ禍で飲食が不可ということから休止していますが、外に開かれた教会という意識は広がりつつあると思います。「信徒による入門講座」もヘルパーはこうした意識で取り組んでいます。

2. 交わりとしての教会をめざして、今後何が求められるか。(質問票 10)

- 新聖堂への移転を控えている現在、この移転を契機として、①教会に若者を呼び戻す、②近隣に開かれた教会作りを行う、③新聖堂に信者ひとり一人の居場所を

作る、という主任司祭の宣教司牧指針の達成のため、主任司祭をトップとして各信徒が具体的な活動目標を設定し、それに向かって具体的行動を起こすことが求められていると思います。前述の通り、信徒の高齢化が進み、過去の良き宗教活動を伝える方々が減少している中、上手く世代交代が行われるよう努力することも必須の要件であると思います。

- 「キリストに聴くこと」、「互いに仕えあうこと」の聖書からの学び直し。
- 責任ある役割を担っている人々の世代交代がスムーズに進んでいないため教会の成長、共同での識別と決断の養成が断絶してしまっているのではないかと。20 年前と現在の状況の比較できるほど情報を共有されていないため、どの程度成果があり、どこに問題点があるのかを常に共有できる状況がまず必要であると思います。
- - ・めざすも目指さないも、まずは、このような取り組みがあることを教会に関わる全員が共有しなければならないと思う。評議委員だけ、あるいは一部の信徒だけが真剣に取り組んでいる。教会外に発信するのも難しい。
 - ・私も含め、教会にはミサにあずかる為に来るだけで十分と思っている方も多いと思う。今後は信者それぞれができることを何か一つでも、教会の内外で役割を果たすことが、「交わり」につながるのではないかと。
 - ・まだその意識が足りないように思う。例えば、信徒が高齢化している若者が少ない現象を嘆くがだけで解決に向けて具体的な行動は出来ないでいる。
 - ・教皇フランシスコが言っておられるイエズス様はカトリック信者のものではなく全世界のもの過去の慣習に戻るのではなく、新しい世界に対応する教会実現が難しく、どのように対応したらよいのか分かりませんが、内向きの活動ばかりではなく外向きの活動、過去の慣習にとらわれず新しい対応の芽が出たら、良いと思っています。
 - ・全体的な、小教区としての運営方針、手法、考え方については、概ね間違った方向には進んでいない。ただ、当教会で最も求められているのは以下の2点。
 - 若年層の三部門強化
 - コロナ禍等で減ってしまった信徒情報の見直し。
 - ・交わりとしての教会という意識づけは、まだまだ進んでいない。冊子の配布だけではなく、常にその取り組みを意識させていく取り組みが、小教区だけでなく、地区、教区も含めて希薄であるように感じる。当面は、アフターコロナに向けて徐々に教会活動自体を再開させていくことが必要になる。個々の教会活動が充実して初めて交わりを考えていく状況がうまれてくるのではないかと。
- 小教区レベルでは若い世代、特に高校生、大学生が減ってきており、仲間が少ないと思われますので教区レベルの活動、具体的には横浜教区カトリック学生連盟の果たす役割は今まで以上に重要であると思われます。教区レベルで培われたパワー（体験や経験）を小教区に持ち帰り発揮するという形になることが期待されます。

以上

世界代表司教会議（シノドス）第16回通常総会に向けてのアンケート
ー「交わりとしての教会をめざして」歩んできた横浜教区の20余年を振り返ってー
神奈川第三地区回答

1. 交わりの諸次元はどの程度深まってきたか？

1) 諸教会の交わり

① 外国籍信徒の交わり

Q1. 外国籍の信徒、そして外国語コミュニティとの交わりはどのように変化してきたでしょうか。それらの方々が、教会の一員として典礼やその他の教会活動に参加できるようになってきているでしょうか。

- 外国籍信徒との交わりは深まっている。
- 外国語のコミュニティが形成されている教会と形成されていない教会がある。
- 各外国籍コミュニティと日本人コミュニティを分けてミサを行うケースと共同体の一体性を意識して一緒に行うケースがあるが、いずれも場合も教会の活動を通して共に働く機会も増やしており、特に教会学校において交わりが活発であるケースが多い。また教会委員会のメンバーとして参画、または教会委員会と連携を取る方向に進んでいる。
- 技能実習生など短期的に滞在するケースが増加しているが共同体に入るための対応は課題となっている。

② エキュメニズムの促進

Q2. キリスト教の他教派の教会との交わりは深まってきたでしょうか。それぞれの地域において、カトリック以外のキリスト教会と祈りや活動を共にする機会が大切にされてきたでしょうか。

- ほとんどの小教区では年に一度の合同祈禱会への参加に留まっているが、災害時の対応など地域の活動で交わりを持つ機会や個人ベースの活動を通して交わる機会もある。

2) 聖職位階の交わり

Q3. 司祭団は交わりと協働を持って、聖職者中心主義、小教区中心主義からの脱却を図ってきましたか。

- 20年前と比較すると聖職者中心主義から「信徒と共に働く」、「信徒の主体的な活動を支える」姿勢に変化してきている。
- 教会学校、青少年活動や召命に関する活動や司祭不在時の対応において地区内の協力は定着している。
- 毎月の地区内司祭の集いも継続されており、交わりと協働の基盤となっている。
- 司祭間の協働を謳うだけでなく立場上、孤独になりがちな司祭を支える仕組みや取り組み、司教を含めた司祭団の更なる交わりの深化の必要性も感じられる。

3) すべての信者の交わり

a) 共同宣教司牧について

＜横浜教区は「聖職者中心主義」から脱却し、すべての信者、すなわち信徒・修道者・司祭の三者が交わりのうちに協力して働く「共同宣教司牧」を目指してきました。＞

Q4. この20年以上にわたる歩みの中で、信徒・修道者・司祭の交わりは深まってきたでしょうか。そして、この三者が協働して神の国の実現を目指すという意識は高まってきたでしょうか。

- 教区懇談会、三者の交流会などへの多くの人の参加を通して交わりは深まっている。小教区・地区・教区の各レベルで三者が共に働く活動を通して協働して神の国の実現を目指す意識は高まっている。
- 修道会の活動が縮小していることから、地区レベルでは修道者の参加が難しくなっている。一方で地区共同宣教司牧委員会に参加することで修道会のミッション、難しさを含めた現状を信徒・司祭にも知ってもらう機会にもなっている。
- 一部では多くのことを司祭に頼るほうが楽という意識も残っている。
- 「協力」、「協働」という表現では不明確な、共同宣教司牧における聖職者と信徒の関係、それぞれの役割、責任、権能、リーダーシップに関して共通認識が不足していると感じられる面もある。

b) 「地区共同宣教司牧委員会」と「三部門」について

＜共同宣教司牧を推進するため、また「小教区中心主義」からの脱却を目指して、横浜教区では16あるすべての地区に「地区共同宣教司牧委員会」が置かれ、また教会にとって欠かせない三つの使命を果たしていくために各地区に「三部門」が設置されました。＞

Q5. これまでの地区共同宣教司牧委員会の歩みを通して、小教区中心主義を乗り越えられてきたでしょうか。「地区」として共に歩む意識は深まってきたでしょうか。

- 全体会(1回/四半期)、懇親会(1回/半期)、各三部門会合等の定期的な会合を継続することにより、「小教区」を越え、「地区」として共に歩む基盤が機能するようになり、全体として意識は深まっている。
- 全体会等では「小教区」・「三部門」の代表者のほか青少年、ENCOM、ステラマリス等の活動グループのメンバーも参加しており、「小教区」、さらに「地区」を越えて共に歩む意識を地区共同宣教司牧委員会として醸成している。
- 「地区」として取り組むイベント等の明確な課題に対して協働することを通してそこに関わる信者の意識は深まっている。「小教区」を越えたイベントへの参加を楽しみにしている信徒もいる。
 - 末吉町教会聖堂建替
 - 一粒会大会
 - 横浜天主堂献堂150周年記念
 - 力障連横浜全国大会
 - 寿町での米・古着の提供等の支援
- 上記のイベントのほか合同サマーキャンプの企画などをきっかけにした地区教会学校リーダー会の発足など、具体的な「地区」のニーズに対応した交わりの場を設定し、「地区」として共に歩む意識を深めている。

- 一方で地区としての活動に参加したことがない信徒にとっては「地区」として共に歩むという意識は深まっていない。
- 「小教区」と「地区」の関係性への認識に相違もある（「小教区中心主義」の定義が不明確）。

06. 三部門の営みによって、社会に向けて「祈る力」「信仰を伝える力」「神の愛を証しする力」は育ってきたでしょうか。祈り、伝え、証しする使命を神からいただいて派遣されているという意識は深まってきたでしょうか。

- 三部門の活動が継続されていること、活動の参加経験者が増え行くことで「育てる力」は少しずつ育っている。
- 三部門の活動の参加者は活動における役割を果たしていくことで派遣されているという意識が深まっている。
- 一方で三部門の活動が「小教区」の活動に落とし込めていないため、活動に参加していない信徒へのアプローチが十分でないこともあり、派遣されているという意識が薄いと感じられることも多い。

2. 交わりとしての教会をめざして、今後何が求められるか。

【基盤整備】

- 「交わりとしての教会」・「共同宣教司牧」に関する理解を深める・広げる
 - ・ 「交わりとしての教会」の示すもの、「共同宣教司牧」における三者の役割など理解を深め内容を、信徒により分かりやすく伝える取り組み。
 - ・ 共に歩んできたことで感じられたこと、得られたことなどの喜び、癒しなどの具体的な経験を共有する取り組み。
- 交わりの機会を増やす
 - ・ 「地区」レベル、「小教区」レベルでもニーズに応じたイベント、奉仕、学びの場、分かち合いの場など様々な交わりの機会をつくる。
 - ・ 様々な状況にある信者が参加しやすくなる工夫。そのために前例にとられない、開催・運営・企画。
 - ・ 「地区」等の取り組みを小教区の活動に落とし込む工夫。
 - ・ 自分のいる共同体とは異なる共同体、様々な世代との関係を意識した活動。
- 情報の共有
 - ・ 普段からまたは定期的に信者一人ひとりの声を聞くこと、信者の想いを共有する取り組みと工夫。
 - ・ 「教区」・「地区」・「小教区」からの発信をより理解しやすく、アプローチしやすく工夫。
 - ・ 「地区」、「小教区」、「個人」の共通する課題、ニーズを共有する工夫。
 - ・ 様々な情報が発信されているなかで必要な人が必要な情報にアクセスしやすくする取り組み。
 - ・ 研修会などイベント以外での取り組みの参加者の感想や実施者によるフィードバック。

【姿勢】

- 小さな人に光を当てる・寄り添う。
- 信者も含めておかれた状況が様々であり異なることに配慮する。共同体から離れている人、交わりに入りにくさを感じている人がいることを意識する。

【祈ること】

- 共に祈る機会を大切にする。
- ミサが日常の信仰生活とより密接になり生き生きとしたものになる工夫。
- 日本も含めた各共同体のメンバーの文化をより生かしつつ、異なる文化を持つメンバーの交わり・一致を促進する典礼を工夫。
- ミサをはじめとした典礼に関する理解を深める取り組み。

【証すること】

- より教会の外に目を向け、教会から出ること。
 - ・ 地域の状況を把握し教会内で共有する取り組み。
 - ・ 地域の活動へ参加し、地域の人々と共に歩むことを心がける。近隣のカトリック以外のキリスト教会との関係を心がける。
- 教会を開かれたものとして地域貢献を通して証する。
- 社会での生活を通して証する信徒の信仰生活を支える取り組み。証しのスタイル、難しさなどを共有する。

【伝えること（教会外も含めて）】

- SNS 等の現代の人にアプローチしやすいツールを活用して情報を発信する（多くの方がカトリック教会に関心を持っているが敷居が高いと思われるとの認識の前提で）
 - ・ 神の言葉をわかりやすい形で Youtube 等で流す。
 - ・ 未信者の側に立ってカトリック教会の姿を積極的に社会に発信する。
 - ・ 個人的な信仰生活や、公式見解にとらわれず個人の考えや想いとして開示できるレベル・方法を明確にして、知らせる。
- 身近な人に神の愛・信仰を伝えるためのサポート、伝える方法、難しさ・喜びを各場面に応じたものを共有する。
 - ・ 教会
 - ・ 家庭
 - ・ 学校も含めた近隣の付き合い
 - ・ 職場

以上

世界代表司教会議（シノドス）第16回通常総会に向けてのアンケート
—「交わりとしての教会をめざして」歩んできた横浜教区の20余年を振り返って—
【神奈川第四地区回答】

Q1. 外国籍の信徒、そして外国語コミュニティとの交わりはどのように変化してきたでしょうか。それらの方々が、教会の一員として典礼やその他の教会活動に参加できるようになってきているのでしょうか。

A1:【神奈川第四地区回答】

第四地区内には、外国籍信徒がいらないかほとんどいない小教区と、いる小教区の両方があります。

対応としては、「聖書と典礼」の各国語版を準備している例、聖書朗読や共同祈願を母国語でお願いしたり、聖体奉仕者や侍者として外国籍信徒が典礼に参加している例があります。

また、一つの教区では月1回の主日のミサを「国際ミサ」と称して、日本語、スペイン語、英語で開催し、別の教区では月1回英語ミサを行っています。

一つの教区では教会委員会に外国籍信徒が委員として参加しています。

それ以外に、ミサ後に「日本語教室」を開催したり、バザー、大掃除等の行事に外国籍信徒が進んで参加している例があります。

Q2. キリスト教の他教派の教会との交わりは深まってきたでしょうか。それぞれの地域において、カトリック以外のキリスト教会と祈りや活動を共にする機会が大切にされてきたでしょうか。

A2:【神奈川第四地区回答】

「キリスト教一致祈祷週間」やクリスマスに関わる行事がキリスト教他教派と交流する機会となっています。また、キリスト教他教派と月一回朝祷会を行っている地域もあります。

東日本大震災復興祈願では、キリスト教だけでなく仏教、神道などとも交流している地域があったり、社寺の住職による聖堂での講演会が行われている教区もあります。

また、バザーでのキリスト教他教派との相互交流や寿地区センター物品等の支援（日本基督教団の活動）に協力している教区もありますが、コロナ禍等で活動が制限されてきています。

なお、活動が一部の担当者、関係者に限られたり、頼ってしまっていて、一般信徒の関心が高まるまでにはいっていないのが現状です。

Q3. 司祭団は交わりと協働を持って、聖職者中心主義、小教区中心主義からの脱却を図ってきましたか。

A3:【神奈川第四地区回答】

第四地区共同宣教司牧委員会の運営は司祭、司祭同士、そして信徒との協働をもって行われ、第四地区内の他小教区との交流や連携を促進するよう努力しています。

ただし、主任司祭によって考えが変わることもあり、聖職者中心主義、小教区中心主義からの脱却にはまだまだ時間がかかると思います。

Q4. この20年以上にわたる歩みの中で、信徒・修道者・司祭の交わりは深まってきたでしょうか。そして、この三者が協働して神の国の実現を目指すという意識は高まってきたでしょうか。

A4:【神奈川第四地区回答】

第四地区内では、信徒、修道者、司祭が集い、共同宣教司牧を目指しています。そして、「地区共同宣教司牧委員会」と「三部門」の活動に参加する中で、信徒・修道者・司祭が協働して神の国の実現を目指すという意識は、徐々にではあるが高まっていると感じている小教区がある一方で、信仰も教会生活もまだ個人のもので、三者が協働して「神の国の実現を目指す」という意識の高まりは感じられないという小教区もあります。

また、共同宣教司牧を推進するためのプログラムとして「信徒・修道者・司祭による共同宣教司牧交流会・養成講座」や「信仰を分かち合う合宿交流会」が行われ、これらによって三者協働の意識は年々高まっているという小教区、ミサ準備などにできるだけ多くの信徒が関わることにより、信徒の参加意識が高まってきたという小教区、「福音宣教部会」を新たに立ち上げ、教会の外に目を向ける活動に試行錯誤している小教区があります。

主任司祭の宣教司牧方針や考え、意識レベルが必ずしも同じではなく、意識の高まりが教会全体に浸透するには至っていないように思います。

特に教区司祭外(修道会、宣教会司祭)への横浜教区の考え方、方針を浸透していたかかないと、主任司祭が教区司祭でなくなると共同宣教司牧が途絶え、主任司祭中心になってしまいます。

Q5. これまでの地区共同宣教司牧委員会の歩みを通して、小教区中心主義を乗り越えられてきたでしょうか。「地区」として共に歩む意識は深まってきたでしょうか。

A5:【神奈川第四地区回答】

司祭叙階式や共同堅信式などを通じて、地区としてまとまり、結束が強まったように思います。また、教会委員長同士の交流も定期的に行われています。

第四地区「祈る力を育てる部門」連絡会では、定期的な会合を通じて、典礼行事を中心に小教区の間で情報交換を行い、近年では「ミサのない主日の集会祭儀」についての勉強を行ってきた結果、「地区」として共に歩む意識は深まってきたと思います。

また、「神の愛を証しする力を育てる部門」連絡会では、各小教区が抱えている問題、現状の情報交換からスタートし、地区全体として同じ問題に関心を持つことを目的として、依存症について理解するために講演会を継続的行ってきました。

第四地区の小教区合同で春の合宿等イベントを行い、特徴的だった青少年部会の活動が活発だった時は、若い人達の間地区としての仲間意識が強くありました。しかし、少子化の影響で一部の青年に負担が掛かるようになったためか、残念ながら最近は活動が停滞しています。

一方で、多くの信徒が地区としての意識を持つ程にはまだ至っていないのが現状である、地区共同宣教司牧委員会の存在・活動・歩みが見えず、存在を知らない信徒が多いのではないか、第四地区は地理的条件で京急線沿線とJR横須賀線沿線で住民の構成も違い、地区としての融和は進んでいないのではないか、小教区ごとで自己完結しており、他の小教区との協働の必要性をあまり感じていない、といった意見もあります。

Q6. 三部門の営みによって、社会に向けて「祈る力」「信仰を伝える力」「神の愛を証しする力」は育ってきたのでしょうか。祈り、伝え、証しする使命を神からいただいて派遣されているという意識は深まってきたのでしょうか。

A6:【神奈川第四地区回答】

いくつかの小教区では、2007年の司教教書を受けて、教会委員会の組織を三部門に再編成しており、三部門の名前自体は信徒に浸透した、あるいは三部門への意識が高まってきたと感じています。また、三部門の営みによって、司祭に頼るだけではなく、信徒としてできる範囲で協働しようとする姿勢が育ってきているが、外の社会に向けての発信力は、未だ不十分だとの意見があります。

例えばキリスト教講座を信徒も担当するようになっていて一方、信徒の自主性を重んじるあまり司祭の関与が次第に希薄になり、信徒・修道者・司祭の協働とは言い難い状態に陥っているという小教区や、外部への宣教活動は主任司祭の意向にお任せという姿勢が支配的だという小教区があります。

一方、「三部門」の存在を知らない、興味がない信徒が殆どだ、信徒の王職、祭司職、預言職の役割、使命について認識がない、担当者レベルにとどまっていて、教会全体への浸透はまだまだであるという小教区や、信仰が個人のうちに留まっていて、社会へ派遣される使命感を感じるまでに未だ至っていないという小教区があります。

三部門が別々に活動しても信徒ひとりひとりの信仰を深め、生きる力となることは望めず、三部門が連携してこそ深まっていくのではないかと、信仰生活は三部門が独立したものではないので、抜本的な見直しが必要であるとの意見がいくつかの小教区から出ています。

これに対し、「東日本大震災追悼のつどい」で三部門が連携して取り組んだ成功例があるという小教区や、「信徒は神から派遣されている」ということを意識化する活動展開に取り組むことを目指したり、今後環境問題などに三部門が協働して取り組むことを通して、祈り、伝え、証しする使命を神からいただいて派遣されているという意識が深まることを期待しているという小教区があります。

2. 交わりとしての教会をめざして、今後何が求められるか。

A:【神奈川第四地区回答】

信徒が内向きにならず、小教区内だけの活動ではなく、自分たちの周りの地域社会で起こっていることに目を向け、それを自分の信仰の問題としてとらえ、「地域社会の中の教会」を意識し、今までの教会の在り方を見直し、イエスの福音をどのようにすれば社会に伝えていけるか考え、活動することが求められています。

災害時や困難な時の助け合いだけでなく、正義と平和を目指して、日ごろから教会こそが人々を受け入れ、地域とともに歩める存在であるよう、小教区間をはじめ、他教団、他宗派、地域とのつながり作りが求められています。

信徒は自身の信仰生活をより生きたものにするために、家庭生活をはじめ日常生活や地域での交わりのなかで、キリストの生き方を実践することで、社会の福音化に貢献でき、自身の信仰生活も深まり、神の国建設により良い貢献ができると思います。

青少年をどのように育成するかが大きな課題です。少子化だけでなく、塾、クラブ活動

等でミサに参加しない状態が広がっています。また若い世代はネットで繋がっている世界であるのに対して、それを踏まえた司牧方法がほとんど採用されていません。これから、青少年は小教区よりも地区あるいは教区での集まりに期待がかかるところです。

各教会や教区のホームページが宣教の目的にはほとんど適っておらず、多くは信徒向けの内容になっており、もっとネットを活用して、キリスト教を求める人に応えて行けるようにするべきと思います。

すべての活動の原点は意識の共有であり、信徒・修道者・司祭それぞれが協働という意識を再確認し、それを共有する必要があると考えます。教区としての共同宣教司牧がスタートして20余年が経過した今こそ、原点に立ち返って関連する司牧書簡や司教教書などを再読し分かち合う機会を設けても良いのではと思います。

やはり主任司祭の果たすべき役割は大きく、よい牧者が必要であるとともに、司祭の意識の統一が必要だとの意見があります。

シノドスアンケートの回答 横浜教区第5地区共同宣教司牧委員会

1. 交わりの諸次元はどの程度深まってきたか？（質問票1～4も考慮して）

各質問に対して小教区ごとに「できている」「ややできている」「あまりできていない」「できていない」の4分類で回答してもらいました。（各小教区の回答の詳細は、後述の補足資料を参照）

Q	質問	できている	ややできている	あまりできていない	できていない
Q1	1) 諸教会の交わり(pp.6-7) ①外国籍信徒の交わり 外国籍の信徒や外国語コミュニティとの交わりはどのように変化してきたでしょうか。それらの方々が、教会の一員として典礼やその他の教会活動に参加できるようになってきているでしょうか。	1	2	3	1
Q2	②エキュメニズムの促進(質問票7) キリスト教の他教派の教会との交わりは深まってきたでしょうか。それぞれの地域において、カトリック以外のキリスト教会と祈りや活動を共にする機会が大切にされてきたでしょうか。	1	2	3	1
Q3	2) 聖職位階の交わり(pp.8-9) 司祭団は交わりと協働を持って、聖職者中心主義、小教区中心主義からの脱却を図ってきましたか。	1	2	2	2
Q4	3) すべての信者の交わり(pp.9-15 a) 共同宣教司牧について この20年以上にわたる歩みの中で、信徒・修道者・司祭の交わりは深まってきたでしょうか。そして、この三者が協働して神の国の実現を目指すという意識は高まってきたでしょうか。	1	1	4	1
Q5	b) 「地区共同宣教司牧委員会」と「三部門」について これまでの地区共同宣教司牧委員会の歩みを通して、小教区中心主義を乗り越えられてきたでしょうか。「地区」として共に歩む意識は深まってきたでしょうか。	0	1	5	1
Q6	三部門の営みによって、社会に向けて「祈る力」「信仰を伝える力」「神の愛を証しする力」は育ってきたでしょうか。祈り、伝え、証しする使命を神からいただいて派遣されているという意識は深まってきたでしょうか。	1	0	3	3

※Q1の追加意見：今後交わりを深める努力は継続して必要である（藤沢教会）。

2. 交わりとしての教会をめざして、今後何が求められるか。（質問票10）

「祈る力を育てる」「証しする力を育てる」「伝える力を育てる」の観点から回答をまとめました。

祈る力 横浜教区が目指していることをわかりやすく伝える。

祈りと分かち合いの集いを第5地区で行う。

証しする力 司牧書簡を読み直し、理解を深めて行動する。

地区の証し部会と各小教区の証し部も一致させる。

伝える力 教区のビジョンを共有し、地区のビジョンを見直す。

【補足資料 1】シノドスアンケート 各小教区の回答

シノドスアンケートの各小教区の回答を以下にまとめました。

1. 交わりの諸次元はどの程度深まってきたか？（質問票 1～4 も考慮して）

1) 諸教会の交わり(pp.6-7)

①外国籍信徒の交わり

Q1. 外国籍の信徒や外国語コミュニティとの交わりはどのように変化してきたでしょうか。それらの方々が、教会の一員として典礼やその他の教会活動に参加できるようになってきているでしょうか。

原宿教会 原宿教会に訪れる外国籍の信徒は非常に限定的です。現在、ブラジルの方、ベトナム人母子がいらっやっていますが、関係は、いたって良好で、お互いに協力関係にあります。教会活動に関してもよく参加されています。

大船教会 特に変化はないという見方が多数。大船教会は外国籍信徒が少ないため交流がない、あるいは交流があるかわからない。一方で、自身の個人的な外国籍信徒との交流体験について回答された方も多い。他教会での外国籍信徒の活動の様子も複数の報告があり、他教会を通じた交流の形もあり得ることが確認できた。

藤沢教会 藤沢教会にはベトナム・フィリピン・ラティノス・韓国・その他の国の方々が集っており、初めは外国の方という捉え方から次第に、同じキリスト者・共同体の一員であるという受け止め方に変わっていった。20 年ほど前に、活動部の一つとして国際部を立ち上げ、交わりを深めることに努めてきた。第 5 主日の国際ミサでは多言語によるミサへの主体的参加、バザーでの相互協力（料理の提供、テント等の設営と片付け）、クリスマスの馬小屋の設営、教会学校・堅信準備講座への参加がある。

近年は教会委員会へ外国籍信徒代表として参加し、副委員長を担うなど教会活動への協働が進んではきているが、日本人とそれぞれの信徒同士は、もっと共同での活動や学び合いなど、交わりを深めていく面にまだ課題がある。「やさしい日本語」を使う配慮も必要。教会学校では外国に繋がる子どもたちが半数を超えるが、外国籍の保護者との関わりが薄い。

中和田教会 建物を大規模修繕するにあたり、またコロナ禍とも重なって外国籍（ベトナム）の方は減少傾向にあった。しかし特記することは二世の方が典礼の奉仕、朗読、侍者に積極的に関わってくださっている。今後二世の方たちとの関わりに期待したい。

片瀬教会 片瀬教会においては、外国籍の信徒が少なく個人的なつながりになっている。一番の障壁は言葉の問題かもしれない。教会の一員として典礼やその他の教会活動に参加に垣根はないが、参加はほとんどない。

戸塚教会 戸塚教会では、25～30 年ほど前には地域の企業への出稼ぎによるブラジル人たちが多数集い、教会行事にともに参加していた。その後、ブラジル人が帰国した後は、様々な国の方が所属され、最近ではフィリピン人が増え、特に日本人と結婚したフィリピン女性たちは、積極的に行事の企画や準備から関わってくれるので、新しいアイデアなども取り入れられ、活発な

活動となっている。中には小教区の教会委員を務められた方もおられる。また外国籍信徒の方々の希望に応じて月に一度第4日曜日の午後に英語ミサを実施し、日本人も奉仕者として参加し、互いの交わりを深めている。しかし小教区全体から見ると、限られた一部の信徒の交わりに限定されている現実が見られる。コロナ禍で行われなくなってしまったが、毎年1回、守護聖人の祝日のミサとして行っていたインターナショナルミサは、外国籍信徒の人々との交わりを意識し、行動するという点でよい機会であったと考えており、今後、以前のようにインターナショナルミサを再開し、さらに年1回から複数回に増やすことを考えたい。

鍛冶ヶ谷教会 鍛冶ヶ谷教会にはフィリピンその他の国籍の方が信徒数の2%（10～15名）程度であり、あまり意識される存在ではありません。一緒にクリスマスの「ミサ前の集い」で歌を披露したり、ロザリオの祈りのグループを作ったり、バザーでの料理の提供、など一緒にしています。障害者施設との交流イベントでは活躍してくださり、国際的教会の顔としての存在を示してくれています。子どもたちはみんな一緒に遊んでいます。言葉の関係もあり、司祭が外国人であったときは、英語のミサを行うことで司祭との関係が強くありましたが、司祭が邦人となり、信徒で語学力のある方の努力でつながっている部分があります。教会委員会への代表の参加を模索していますが言葉の問題のクリアーが課題です。

②エキュメニズムの促進（質問票7）

Q2. キリスト教の他教派の教会との交わりは深まってきたでしょうか。それぞれの地域において、カトリック以外のキリスト教会と祈りや活動を共にする機会が大切にされてきたでしょうか。

原宿教会 キリスト教の他教派の教会との交わりは、現在のところ皆無です。

大船教会 他教派の教会との交わりは深まってきたという見方が多い。「鎌倉市民クリスマス」「キリスト教一致祈祷週間」「追悼 復興祈願祭（2021年まで）」等に参加して深まりを感じた方がいる一方で、参加したけれど深まったと言えるほどではないという声も一定数ある。そのどちらに対しても、他教派の信徒と祈りを共にする機会は大切との意見がある。個人的に他教派の信徒と交流を持ち信頼関係を築いている方もいる。また、コロナ禍で他教派との交流や活動を共にする機会がないことに触れた意見もあった。

藤沢教会 藤沢市内キリスト教連絡会として、カトリック教会と修道会、プロテスタント各教派教会が合同で、年3回の行事（1月のキリスト教一致のための合同祈祷会、8月の平和のための合同祈祷会、12月の藤沢市民クリスマス）を通しての交わりは50年続いている。各教会の代表者（教職者・信徒）や関心のある方の交流は深まっているが、教会全体に浸透しているとは言えないのが現状。近年、新しく入信した信徒を引率し他教派の教会を訪問し交流を持つことが出来たので、継続していきたい。

中和田教会 泉区にある教会が協力しあって区民クリスマスが盛んに行われていた。20年はコロナ禍でお休みしていたが21年はZOOM配信された。練習会場は今後も中和田教会の聖堂となるだろう。

片瀬教会 キリスト教諸派は互いに一致しようとする意識はある。藤沢市のキリスト教諸派は、市内キリスト教連絡会を設け、キリスト教一致祈祷週間を中心として年2回の合同祈祷会や市民クリスマス会を催す等して交流を行っている。また、コロナ禍で礼拝を中止していた教会から

牧師が片瀬教会でミサに与ることがあり、司祭はそれを快く受け入れていてキリスト者としての一致をみることができた。

カトリックと聖公会との合同祈禱会も実施。

戸塚教会 20年以上にわたって、戸塚地区におけるキリスト教諸教派の教会と一緒に毎年戸塚合同クリスマス礼拝を実施し、そのための準備委員会にも参加している。しかし、祈りや活動を共にする機会はこのクリスマス合同礼拝に限られている面があり、これ以外で何か一緒に活動できる機会を作っていくことが望まれる。

鍛冶ヶ谷教会 2004年に湘南短期キリスト教セミナーを鍛冶ヶ谷教会で行った際に案内を送ったことで、本郷台キリスト教会の20人以上の青年が牧師先生とともに参加くださったことをきっかけにつながりができ、東日本大震災後に、キリスト教会災害支援ネットワークを模索する等の動きがあり、その関係から派生して2021年の栄区内のキリスト教会6教会が合同で、本郷台駅前でクリスマスマーケットを実現しました。この関係の維持は個人的な努力に依る部分がおおきいです。各教会での温度差があり、各教会で共同体全体に浸透しているとは言えないのが現状です。青年たちの交流が出来たので、継続していきたいと思います。

2) 聖職位階の交わり(pp.8-9)

Q3. 司祭団は交わりと協働を持って、聖職者中心主義、小教区中心主義からの脱却を図ってきましたか。

原宿教会 司祭の皆様が、「司祭団」として、団結されていると感じることは、あまりありません。教区内で聖職者中心主義であると見受けられる司祭がいらっしゃることは耳にします。第五地区共同宣教司牧委員会に（部門別会議も含め）参加し、また、黙想会の指導に他小教区の司祭を招くことにより、小教区中心主義からの脱却を図る努力はしていると思う。

大船教会 聖職者中心主義、小教区中心主義からの脱却を図っているという見方が多い。その理由として、司祭が信徒と相談していたり、司祭が共同宣教司牧を口にして信徒の協働で運営していたりすることなどが挙げられた。一方で、「～主義」という言葉に違和感や抵抗感を持つ声も一定数ある。教会は司祭が中心に運営されることは当然なため。また無記入も多く、そもそも両主義の脱却という方針そのものが全体的に浸透していない可能性も見受けられる。司祭や修道者の数が減っている現状から、信徒が小教区の枠を超えて司祭団をサポートすべきという声もあった。

藤沢教会 信徒の育成（入門講座、幼児洗礼の保護者への準備講座、初聖体準備、堅信準備、成人洗礼準備、結婚準備等の講座）、福祉活動など、司祭の指導・助言を受けながら信徒が行っているので聖職者中心主義からは脱却できていると言える。小教区中心主義についても小教区を超えてつながりを持ち、協働する事を勧めている。

中和田教会 例えば入門講座を信徒が担当する意義が理解されていないので、入門講座担当者養成講座などへの参加者が少なく、他教会の方々と会う機会が少ないと思われる。

片瀬教会 第5地区の司祭の集まりがあり、地区内の活動そのものの話し合いをしている。

戸塚教会 第五地区における司祭団の関係は至って良好と言える。しかしながら、年齢、個々人が

抱える背景、教会観、福音宣教観に多様性が見られ、司祭団内における多様性の一致が求められる。横浜教区が目指す共同宣教司牧の理解と協力から、司祭団は信徒と共に歩む姿勢が取られていると感じる。また、小教区中心主義からの脱却は、同地区のいくつかの近隣教会合同で、毎年 11 月に野外ミサを執り行い、七五三をお祝いするとともに、ミサ後に互いの懇親を深める時間を設けるなど、交流する機会が持たれるようになった。各小教区内での活動に終わらず、近隣の教会の状態を把握し、共通の課題についてよく話し合う司祭団の更なる交わり、協働が求められる。

鍛冶ヶ谷教会 信徒の育成（入門講座、初聖体準備、堅信準備、成人洗礼準備、結婚準備等の講座）、福祉活動など、司祭の指導・助言を受けながら信徒が自主的に行っていく方向に再度移行中で、依存的な信仰から脱却を勧めています。小教区中心主義についても小教区を超えてつながりを持ち、協働する事を勧めるため地区の共同宣教司牧への積極的な関わりを模索し始めています。近隣への開かれた教会づくりは、幼稚園や福祉施設など近隣との関係づくりをすすめて、小教区のエリアでの共同体の存在を意識できるようになりたいと思っています。

3) すべての信者の交わり(pp.9-15、質問票 5, 6, 8, 9)

a) 共同宣教司牧について

＜横浜教区は「聖職者中心主義」から脱却し、すべての信者、すなわち信徒・修道者・司祭の三者が交わりのうちに協力して働く「共同宣教司牧」を目指してきました。＞

Q4. この 20 年以上にわたる歩みの中で、信徒・修道者・司祭の交わりは深まってきたでしょうか。そして、この三者が協働して神の国の実現を目指すという意識は高まってきたでしょうか。

原宿教会 20 年前に横浜教区のヴィジョンが、司教書簡によって発表された折には、原宿教会小教区内でもそれを大切に受け止め、実行に移すべく理解を深める努力がなされていたことは事実です。しかし、残念ながら、徐々にその意識が薄れ、司祭が交代され、他教区からの司祭が来られたこともあり、信徒も忘れてしまっていました。

ところが昨年より、久我神父様が協力司祭として着任され、司教書簡・教書勉強会を指導され、教区のヴィジョンが素晴らしいものであることを改めて理解し、共同宣教司牧の意識は非常に高まり、三部門の活動も活発化しています。

大船教会 信徒・修道者・司祭の三者の交わりは深まってきたという見方が多数。様々な教会での活動による体験や「おとずれ」の掲載記事から三者の協力が盛んで深まりを感じた声が多い。一方で、三者の交わりが深く浸透していないという声も一部ある。例えば、共同宣教司牧に関わる人とそうでない人とでは感じ方に温度差がある、まだ交わりは少なく参加への工夫が必要、共同宣教司牧は司祭・修道者の仕事という意識が残っている、など。

藤沢教会 三者協働については、教会活動への関わり方によって、個々の信徒の意識に開きがあると思われる。例えば、信徒養成に関わる信徒は、しかるべき養成コースへ派遣され、司祭に助言を求めながら活動するので、自然と交わりは深まるが、活動によっては司祭との交流を持てずに距離を感じている信徒もいる。修道者との交わりは全体としてはまだ深まっているとは言えない。

中和田教会 関わったことがある信徒からは、小教区以外の司祭、信徒の方々との出会いが信仰

を深める良い機会になったという声が聞かれた。またこの交わりがあったことにより戸塚教会との協力体制、藤沢教会での堅信式に至った。

さらにこの動きが第五地区内のみに留まらずもっと自由に横浜教区として深まればと期待する声もあった。

片瀬教会 三者が協働して神の国の実現を目指すという意識の高まりはあまり見られない。信者の中にこのようなことがあまり浸透しておらず、未だに全てを司祭の指図を待っているというスタンスの信徒も少なくない。また、全体的な高齢化により、修道者が教会へ足を運ぶ機会も少なくなり、交流が減っているように思える。

戸塚教会 信徒、修道者、司祭の交わりは深まってきていると感じる。互いに助け合おうとする意識は確実に強まっている。しかしながら、三者が交わりのうちに協力して働くことを具体的にどう実践していくか、その具体的な姿が見えていない印象がある。どのように行動するべきなのか、その点で迷子になっており、効果的に動けていない。三者が協働して神の国の実現を目指すという意識も、目指すべき具体的な神の国の姿が共有されておらず、目標が明確でないままスローガンで終わってしまっている。三者が交わりのうちに何を目指したらよいか、その具体化について分かち合いを続け、横浜教区の目指す目標に少しでも近づいていきたい。

鍛冶ヶ谷教会 現在、協働で行っていくために司祭とともに、再度教区のビジョンの再確認、3部門の設置、信徒の自主的・積極的宣教司牧への関わりを作り出すために努力しています。

信徒養成に関わる信徒を、再度本年より養成コースへ派遣し始めています。

また、信徒による自主的な福祉や宣教のための活動、エキュメニカルな活動も動き始めています。

修道者との交わりは、鍛冶ヶ谷幼稚園運営から修道会が撤退したため、小教区では修道会とのコミュニケーションがなくなったので、第5地区での協働を模索したいとおもいます。

b) 「地区共同宣教司牧委員会」と「三部門」について

＜共同宣教司牧を推進するため、また「小教区中心主義」からの脱却を目指して、横浜教区では16あるすべての地区に「地区共同宣教司牧委員会」が置かれ、また教会にとって欠かせない三つの使命を果たしていくために各地区に「三部門」が設置されました。＞

Q5. これまでの地区共同宣教司牧委員会の歩みを通して、小教区中心主義を乗り越えられてきたでしょうか。「地区」として共に歩む意識は深まってきたでしょうか。

原宿教会 ごく最近ではありますが、第五地区におきましては、三部門がそれぞれに司教書簡・教書の読み合わせを行っています。そのことで、小教区中心主義を乗り越え、ともに歩む意識が高まって来たといえると感じます。

大船教会 小教区中心主義については、乗り越えてきたという見方とその逆の見方、また無回答が同じくらいあり、意見が分かれる。乗り越えてきたという見方には、教会間での合同ミサや研修などの活動や交流を通して意識が深まってきているといった声がある。逆の見方には、第5地区を意識する人は限定的で全体的にはまだまだ浅い、この2年間はコロナ禍の制約で活動ができず意識が深まらないといった声がある。無回答が一定数あることにこの問いに対する言及の難しさや、「第5地区」に対する意識があまり浸透していない印象が感じられる。その他、

第5地区以外の近隣教会との交流にも意識を向ける必要性への言及もあった。

藤沢教会 信徒全体の視点では、地区共同宣教司牧委員会はまだまだあまり認識されていないと感じる。今まで小教区へのフィードバックが足りなかった感がある。

それぞれの小教区はその独自性を大切にしながらも、互いに刺激と励ましを受け、足りない点やもっと広めていきたいことにチャレンジしていけると良い。小教区と地区相互の関わりはお互いを生かすものであるという意識は少しずつ芽生えており、近隣地区の福祉交流会は7年目、第5地区の中でのカトリック入門講座の担当者の交流（勉強会・黙想会）は10年程、近年は典礼に関わる方の交流会が始まっている。今後、広報部は地区内の他教会との交流の機会を希望している。

中和田教会 中和田はこの度横浜教区、第5地区の支援をいただき新しい教会となったが、これをきっかけに開かれた教会となるよう意識改革が必要である。

片瀬教会 地区共同宣教司牧委員会の中では小教区中心主義脱却の意識はあり試行錯誤的に活動してきている。しかし、小教区間には、意識の差があり、積極的に取り組んでいる小教区もあれば、信徒に共同宣教司牧の意識が落とし込めておらず、信徒の動きが小教区内にとどまっている部分がある。地区として共に歩む活動としては、キリスト教セミナーや中和田教会再建の資金提供等がある。

戸塚教会 第五地区の共同宣教司牧委員会は、定期的に集まりが重ねられているが、地区共通のビジョンが固まっていないので、何をするのかがあいまいになっている。地区の全体会議前に実施される教会委員長会議では、長野などの小教区存続が危ぶまれる地方教会とちがい、危機感が薄いので、実務的、実践的な動きにはつながっていないとの話が出ていた。一方で教会建て替え問題に直面した中和田教会に見られた地区との連携、宣教の必要性の関心が高まったことについて地区内で意識を共有できた。今回経験したコロナ感染症予防対策の情報交換を地区内の小教区間で実施できたことは、小教区中心主義を乗り越え、協働するきっかけになれたと感じる。今後、第五地区の共同宣教司牧委員会のあり方、そこで何を行ったらよいかよく見直し、第五地区として共に歩むとは具体的に何を行うことなのか明確にしていきたい。

鍛冶ヶ谷教会 信徒全体には、地区共同宣教司牧はまだあまり認識されていないと感じます。

中和田教会の聖堂改修への協働は、地区の協力の必要性の意識を高めたので有意義であったと思います。

いろいろな意味で小教区の長期ビジョン（将来構想）を作成する必要性を認識しました。小教区のビジョン作成に関しても、地区の小教区どうしの協働の形を創ることを含めたいとおもいます。

各小教区の3部門の担当者による地区の会議を報告会に留めず、地区での共同企画を模索するための会議とするよう勧めたいと思います。

Q6. 三部門の営みによって、社会に向けて「祈る力」「信仰を伝える力」「神の愛を証しする力」は育ってきたでしょうか。祈り、伝え、証しする使命を神からいただいて派遣されているという意識は深まってきたでしょうか。

原宿教会 原宿教会小教区の中で、三部門の意識は確かに高まってきていると感じます。司教書

簡・教書の読み合わせをすることにより、教区のヴィジョンを大勢が理解したことによるものです。結果として、教区のサポートチーム神奈川の研修に多くの信徒が参加するようになり、三部門の力を育てる努力を行っていると思います。

大船教会 三部門それぞれの力が育ってきたという見方が多数。各部門の取り組みに対して述べたものや、意識的な意味合いで深まっている点に対して述べたものがある。一方で、「社会に向けて」という点を捉えると「まだ育っていない」という見方や「育っているかわからない」という見方も一部あり、また無回答も一定数ある。「三部門」の存在や活動内容を把握していない声もあり、まだ浸透していない面も見受けられる。

藤沢教会 三部門についても、意識がある人と未だによくわからないという人と、分かれると思う。一人の人の中に、一つの共同体の中に3つがあり、一つ一つが独立しているのではない、というところがまだ深まっていない。活動部（3部門）が毎月1回集まりを持ち、協働する意識を高めているので、この意識を教会全体に広げていきたい。社会に対しての宣教の窓口として教会ホームページの果す役割は大きいと感じている。

中和田教会 三部門について全く知らない信徒、聞いたことがあるくらいの声が多かった。三部門について特に知らなくても派遣され伝えるという立場にあると認識しているとの声もあった。

片瀬教会 社会に向けての3つの力は少しずつだが育ってきている。但し、ともすれば神からいただいて派遣されているということを忘れ、人間の力で物事を成そうとすることがある。

戸塚教会 戸塚教会の信徒の中に、「祈り」「伝え」「証する」使命を神からいただき派遣されているという意識を持っている人は少ないように思われる。横浜教区の三部門の営みについて知らない人も多い。また、三部門の担う役割の実践的課題も不明確なので、抽象論にとどまっている。現実を踏まえどう行動するか、そのための具体的な話し合いの場が必要である。同時にこの三部門を別々に捉えるのではなく、同じ一つの使命の中の三部門として意識することが大事である。その意識化、そして力を育てるためにどのように地区内、各小教区内で実践していくか、具体的な分かち合いの場が求められる。現在、地区としての三部門の集まりも別々に行われ、その報告がなされることで終わっている印象がある。「祈り」「伝え」「証する」使命を神様からいただき派遣されているという意識をもう一度再意識化し、三部門の働きも実際に力を育てるという養成に主眼を置いて実施していくことを望む。

鍛冶ヶ谷教会 三部門についての理解は、部門担当者についてもまだ十分ではありません。「育てるのは聖職者」の仕事でそれが司牧だ。と現在でも信徒の養成を信徒が行うことに違和感を覚えている信徒は多く、自分が育てる立場になるということへの自覚は乏しいようです。祈り、伝え、証しする使命を聞いてはいるが、実践しているか、その難しさなどの分かち合いも行われていない。意識の深まりの確認もされていません。信仰の分かち合いの場は未だ教会内で十分とは言えません。

信徒の意識が教会共同体の中に向いています。（信仰＝教会への奉仕）意識を中だけに留めず、（信仰＝神とともに行う社会への愛・奉仕）に変えていく必要があります。

2. 交わりとしての教会をめざして、今後何が求められるか。(質問票 10)

原宿教会 改善されつつあるとはいえ、地区や小教区内で、教区のヴィジョンが共有されていない場面に遭遇することがあります。すべての信者（信徒・修道者・司祭）が横浜教区のヴィジョンを共有することが今後求められると思います。教区のヴィジョンは、『交わりとしての教会をめざして』の「皆が一つになって」に示されており、『横浜教区の改革の基本方針』の「はじめに」で、その実現のため改革の取り組みとヴィジョンの共有を奨められています。

2007年に組織改革が行われたにもかかわらず、いまだに小教区や地区で共同宣教司牧（信徒・修道者・司祭による）が実現できていないのは、一致の契機である横浜教区のヴィジョンが共有できていないからではないでしょうか。

『教区長の時間』の「はじめに」の結びで、「信徒・修道者・司祭の皆さんで読み合わせをしていただければ幸いです。」とされています。横浜教区の宝とも言える司教書簡・教書の読み合わせが各小教区で行われれば、教区のヴィジョンは必ずや実現し、交わりとしての教会が実現するのではないのでしょうか。

信徒ひとりひとりが、自分の中に三部門を持ち、三部門に生きることを意識し始めます。

まずは神様の声を聴き、神様の思いで生きようとしします。そして、小教区内でお互いの声を聴き、お互いを認め合いつつ、多様性に満ちたいきいきとした共同体を形成していけることと思います。

教区で示されたヴィジョンが土台に据えられれば、いきいきとした共同体作りは、難しくとも実現できるのではないのでしょうか。

そして、いきいきとした共同体の中で、自分を生かしていけたら、近隣教会との交わりや、地区内での活動においても、自ずと多様性を認めつつ交わりの意義を感じることができると思います。そしてさらには、家族・職場・学校・地域社会などにおいても、自分を捧げることができるのではないのでしょうか。

大船教会 コロナ禍や少子高齢化で交わりが薄れている大船教会の現状を踏まえて、これからの教会の姿として「開かれた教会・交わりのある教会」をめざしたい。この「交わり」には「信者間の交わり、世代間の交わり、同世代の交わり、国籍を越えた交わり、未信者との交わり、そして神との交わり」があげられる。

この教会をめざすために今後求められることに、次の取り組みが考えられる。

- ・出かけていく教会になる：特に近隣に対して（困っている人を助ける、等）。
- ・地域との交わりを持つ：例）昔のバザーのような活動を形を変えて行う、等。
- ・若者の活躍の場をつくる：第5地区や他教会の活動にも目を向ける。親も子も一緒に活動できる場づくりを。
- ・高齢化で支え手が減る部分の対応を考える：現在の地区割の見直しが必要な一方で、体制の変化に高齢者が対応できるか懸念もある。
- ・デジタル技術を活用する：特に若者や外国籍信徒向けに。
- ・コロナ禍後の教会活動を考える：コロナ禍前の活動にただ戻すのではなく、以前と変えないところと変えていくところ（コロナ禍で必要に迫られて始めたもの等）を識別するための踏み込んだ議論が必要。

藤沢教会 まず祈りを通して、低く謙虚でいられることで、小さな声を聴き、自分とは異なる考え、意識を持っている人の意見をこそよく聴き、違いを乗り越えて、互いにわかち合いの場（同

じ世代、異なる世代、若い世代、異なる文化で）を持つ。司祭・信徒・修道者はより一層、互いに交わりの機会を意識して持つ。聖霊に信頼し、イエス・キリストの内に一致し、あたたかい、親しみのある共同体である事。

中和田教会 共同体として共同宣教司牧の意義、目的が理解されていないので積極的に知らせていく必要がある。3部門の集まりがフィードバックされ小教区（共同体）で共有される必要がある。司祭に対しても、グループ間、世代間ギャップを埋めるためには対話と分かち合いが求められる

＜その他、中和田のこれから＞

新しい試みが空振りであっても積極果敢に取り組む。一つの方向に固執しないで、状況に応じて変化を恐れず進化していく。

片瀬教会

- ・信者一人一人にカリスマの多様性、奉仕の多様性が認識され深められていくこと。協働するのは人間の力ではなく、神からの賜物である。従って、まず祈り、お互いを尊重し分かち合い、その中から生まれてくる互いに仕え合う力を養うこと。具体的な活動としては、夫々の教会委員会の交わりの場、地域との交わりの場を設ける。また、家族に対する思いやりを大切にする。一緒にいる時間を大切にするよう配慮することが必要なのではないか。
- ・地区の線引きの見直し。1地区の小教区数を3～4にした方が交わりやすい。

戸塚教会 戸塚教会で今大事にしていることは、教会に来ることができていない人々との交わりである。シノドスの問いかけにある「わたしたちは一緒に歩んでいるでしょうか、一緒に歩むことを怠っていたり、忘れていたり、見捨てている人たちはいませんか」を、まずは教会に来ることができていない人々を忘れることなく、共に歩む仲間として大切にすることとして心がけていきたい。その実践として、いろんな事情で教会に来ることができていない人々が教会とのつながりを保つことができるように、毎週の主日のミサの動画配信、聖書と典礼、主日のミサの説教プリント、今週の戸塚教会の様子を知らせる写真と記事を配布している。また教会内にメール連絡網を整備し、各情報を共有している。同時に、単なる情報共有ではなく、交わりとしての教会をめざして各自に求められている事、各自に神様から与えられている「祈り」「伝え」「証する」使命について、それを具体的にどう実践していったらよいかについて、学び、分かち合う場を大事にしていきたい。各勉強会、研修会に参加できる信徒は限られてしまうので、戸塚教会としては、毎週の主日のミサの説教内容を文字化して配布、配信し、それを「祈り」「伝え」「証する」力を育てる一助にしていきたい。また、基本は一人ひとりがイエス様と親しさを深めることにあるので、戸塚教会では、一人ひとりがイエス様を身近に感じ、大切にしていけるように、毎日イエス様に心で呼びかけ対話することを大事にしたい。それが具体的に祈る力を育てることになる。信仰を伝えることも、単に学んだことを伝えることなく、一人ひとりの信仰の喜びを深めること。そのためにもっとイエス様を知り、身近に感じることができるような学びと分かち合いを大事にする。そこから得られた喜びの体験を周囲に伝えることができるように成長する。イエス様との対話、イエス様を理解しイエス様との親しさを深めることが神の愛を証する力を育てることになることを信じる。今、教会全体で求められている意識改革、すなわち信徒、修道者、司祭が交わりの内に神から与えられている使命の具体的な姿を再意識し、それを老若男女すべてが参加できる運動にしていきたい。また教会の現実を評価して、着手点を発見していく。何が足りないのか、どうしてそうなっているのかを明確にする。また交わりとしての教会のあるべき姿、実現したい具体的ゴールを提示

することも必要である。そのためにどのような協力、協働ができるか、信徒、修道者、司祭が交わりの内に分かち合い、実践につなげていく働きを進めていきたい。同じ小教区である戸塚教会と原宿教会の間を見ても、縦割りの壁があるように思われ、実際のところ年間を通じて合同で活動する機会は少ないように思われる。両教会の垣根を越え、交わりとしての教会をめざして一緒に歩むことができることを共に考えていきたい。

鍛冶ヶ谷教会 信者一人ひとりが、神様から受けている恵みを他の人と分かち合い、証する場が共同体の中心に保たれていることが一致を創りだします。

組織や活動とは別に、共に祈り、神様から受けたものを互いに分かち合う、相互愛の集まり（コア・ヌクレオ・核）を共同体の一致のためにどのように創っていくかが、最も大切な課題です。すべての信者が神様からの恵みを実感し、祈り、分かち合い、愛に生きる共同体を実現できるよう祈りたいと思います。

<その他>

中和田教会 小教区（中和田教会）の振り返り分かち合い

・子供の数が減った→司祭やリーダーたちの存在が大きく子供たちが教会に来ることを楽しんでいた。

家庭集会が横との繋がりを強め助け合いがあった。中和田教会が家庭的な雰囲気があるといわれてきた所以ではないか。今後はこの温かな雰囲気を教会外の方たちに伝えていきたい。

今その頃子供だった大人たちは住居が変わり別の教会に通っている人もいる。現役世代となって日曜日にミサに来ることが難しい事情もある。

・問題点→以前のような婦人会、壮年会といった横の繋がりがなくなり、グループごとの活動に専念するあまり縦割り傾向が強くなりすぎてグループ以外の人との交わりがおろそかになっていないか。また次の世代への引き継ぎができていない。一つのグループの活動に固執しないで他のグループへ変わっていくことも必要ではないか。役割を頼まれることによって共同体の一員となる自覚が持てる。横の繋がりがなくなったので、普段教会にこられない方に教会の変化が伝わっていなかった。目に見えない世代間ギャップを感じる。

教会に来られなくても地域社会で奉仕していることに意義がある。

【補足資料2】「2. 交わりとしての教会をめざして、今後何が求められるか」

各小教区の意見のまとめ

2022.4.24

小教区	①教会の課題	②今後求められること	③具体的な活動
原宿教会	地区や小教区内で、教区のヴィジョンが共有されていない。	すべての信者（信徒・修道者・司祭）が横浜教区のヴィジョンを共有する。	・司教書簡・教書を読み合わせる。 ・信徒ひとりひとりが、自分の中に三部門を持ち、三部門に生きることを意識し始める。
大船教会	コロナ禍や少子高齢化で交わりが薄れている。	「開かれた教会・交わりのある教会」をめざす。	・出かけていく教会になる：特に近隣に対して（困っている人を助ける、等）。 ・若者の活躍の場をつくる：第5地区や他教会の活動にも目を向ける。 ・デジタル技術を活用する：特に若者や外国籍信徒向けに。
藤沢教会	外国に繋がる子どもが増える中、その保護者との関わりが薄い。 一人一人の中に、共同体の中に3つの使命がある事の意識が深まっていない。	聖霊に信頼し、イエス・キリストの内に一致し、あたたかい、親しみのある共同体である事。	・まず祈りを通して、低く謙虚でいられることで、小さな声を聴き、自分とは異なる考え、意識を持っている人の意見をこそよく聴き、違いを乗り越えて、互いにわかち合いの場（同じ世代、異なる世代、若い世代、異なる文化で）を持つ。
中和田教会	共同体として共同宣教司牧の意義、目的が理解されていない。	これらを積極的に知らせていく。	・3部門の集まりがフィードバックされ小教区（共同体）で共有する。 ・司祭に対しても、グループ間、世代間ギャップを埋めるために対話と分かち合いを求める。
片瀬教会	信者一人一人にカリスマの多様性、奉仕の多様性が認識され深められていくこと。	まず祈り、お互いを尊重し分かち合い、その中から生まれてくる互いに仕え合う力を養う。	・夫々の教会委員会の交わりの場、地域との交わりの場を設ける。 ・家族に対する思いやりを大切にすること。 ・地区の線引きの見直し。1地区の小教区数を3～4にした方が交わりやすい。
戸塚教会	教会にcomingすることができていない人々との交わりを大事にしている。 一人ひとりがイエス様を身近に感じ、大切にしている。	教会にcomingすることができていない人々を忘れることなく、共に歩む仲間として大切にすることとして心がけていく。 もっとイエス様を知り、身近に感じることができるような学びと分かち合いを大事にする。	・毎週の主日のミサの動画配信、聖書と典礼、主日のミサの説教プリント、今週の戸塚教会の様子を知らせる写真と記事を配布。 ・教会内にメール連絡網を整備し、各情報を共有。 ・戸塚教会と原宿教会の垣根を越え、交わりとしての教会をめざして一緒に歩むことができることを共に考えていく。 ・毎日イエス様に心で呼びかけ対話する。
鍛冶ヶ谷教会	共に祈り、神様から受けたものを互いに分かち合う、相互愛の集まりを共同体の一致のために創っていく。	信者一人ひとりが、神様から受けている恵みを他の人と分かち合い、証する場が共同体の中心に保たれていることで一致を創ります。	・すべての信者が神様からの恵みを実感し、祈り、分かち合い、愛に生きる共同体を実現できるよう祈る。

世界代表司教会議（シノドス）第16回通常総会に向けてのアンケート ー「交わりとしての教会をめざして」歩んできた横浜教区の20余年を振り返ってー

神奈川第6地区アンケート回答

2022年5月

1. 交わりの諸次元はどの程度深まってきたか?(質問票1~4も考慮して)

1) 諸教会の交わり(pp.6-7)

①外国籍信徒の交わり

Q1. 外国籍の信徒、そして外国語コミュニティとの交わりはどのように変化してきたでしょうか。それらの方々が、教会の一員として典礼やその他の教会活動に参加できるようになってきているのでしょうか。

A1. 外国籍信徒の教会委員会への参加、更には副委員長の要職についている小教区もある。また、典礼奉仕への参加や、降誕祭や復活祭では合同ミサを行い朗読や共同祈願・聖歌など共に担っている。バザーやバーベキューなど小教区の行事にも積極的に参加し協働している。ある小教区では、教会の新施設建築の際に、外国籍コミュニティの要望に基づき設計を行った。外国籍の居住者が少ない地域でも、外国籍の主任司祭の関りで、その国のコミュニティの若者たちと交わりを持つようになり意識が高まっている。言葉や習慣など難しい面もあるが、互いの努力で外国籍信徒との交流が増えていると感じている。

②エキュメニズムの促進（質問票7）

Q2. キリスト教の他教派の教会との交わりは深まってきたでしょうか。それぞれの地域において、カトリック以外のキリスト教会と祈りや活動を共にする機会が大切にされてきたでしょうか。

A2. 年に一度、全世界のキリスト教会で行われる「世界祈禱日」に参加し、近隣諸教派のキリスト教会の方々と協働している小教区もある。ただ、多くの教会が、以前は近隣の教会（日本基督教団や聖公会）との合同礼拝や交流会に参加していたが、残念ながら現在はコロナ禍の影響もあり、途絶えている状況となっている。個人的に他教派の方々と交流している信徒もいるが、教会として交わりや活動を共にすることを大切にしてきたとはいえない。

2) 聖職位階の交わり(pp.8-9)

Q3. 司祭団は交わりと協働を持って、聖職者中心主義、小教区中心主義からの脱却を図ってきましたか。

A3. 第6地区の司祭団は、かなり脱却を図ってきたと感じている。

聖職者中心主義については、主任司祭の考え方や方針の違いもあり、小教区・地区はこの課題を理解し努力してきたが、横浜教区の聖職者中心主義からの脱却や教区司祭団の一致ということは、まだ解決していない課題であると思う。

3) すべての信者の交わり(pp.9-15、質問票5, 6, 8, 9)

a) 共同宣教司牧について

<横浜教区は「聖職者中心主義」から脱却し、すべての信者、すなわち信徒・修道者・司祭の三者が交わりのうちに協力して働く「共同宣教司牧」を目指してきました。>

Q4. この20年以上にわたる歩みの中で、信徒・修道者・司祭の交わりは深まってきたでしょうか。そして、この三者が協働して神の国の実現を目指すという意識は高まってきたでしょうか。

A4. 小教区においても地区においても、信徒と司祭が協力して共同宣教司牧を進める中で、様々な問題を話し合い、共に歩むという意識は高まっていると感じる。ただ、「聖職者中心主義」から本気で脱却するために最も求められているのは、司祭団の意識改革だと思う。また、地区内の修道会が少なくなっているのは残念だが、三者が協働して神の国の実現を目指すという意識は高まっていると思う。

b) 「地区共同宣教司牧委員会」と「三部門」について

＜共同宣教司牧を推進するため、また「小教区中心主義」からの脱却を目指して、横浜教区では16あるすべての地区に「地区共同宣教司牧委員会」が置かれ、また教会にとって欠かせない三つの使命を果たしていくために各地区に「三部門」が設置されました。＞

Q5. これまでの地区共同宣教司牧委員会の歩みを通して、小教区中心主義を乗り越えられてきたでしょうか。「地区」として共に歩む意識は深まってきたでしょうか。

A5. 小教区中心主義については、地区の共同宣教司牧の取り組みによって意識的にも変革されたと思う。地区内の会議や合同行事、主日ミサのローテーションなどを通して交流は深まり、小教区同士が互いに支え合い、共に歩むという意識は深まっていると思う。ただ、地区活動に参加していない信徒には、「地区」という意識はまだ希薄ではないかと感じる。その課題を乗り越えるためには、地区活動をさらに広く伝え、地区内での信徒間の交わりの場を増やすことが必要だと思われる。

Q6. 三部門の営みによって、社会に向けて「祈る力」「信仰を伝える力」「神の愛を証しする力」は育ってきたでしょうか。祈り、伝え、証しする使命を神からいただいて派遣されているという意識は深まってきたでしょうか。

A6. 共同宣教司牧委員会の三部門の委員を経験した人の意識は育っていると思う。これからも信徒が教区の研修などに参加し、三部門の営み(祈り、伝え、証しする使命)に対して理解を深めるとともに、地区での奉仕や交わりを経験することが大切であると思う。ただ、教会の中では出来ても、社会に向けて使命を実践することが出来ているかは難しいと感じることもある。

2. 交わりとしての教会をめざして、今後何が求められるか。(質問票 10)

A. 信徒一人ひとりが、派遣の意識を深め、社会の中で証ししていけるよう養成され成長していくことが求められる。その基盤としての小教区が、司祭と信徒、そして信徒同士の交わりを深め、信仰共同体としての存在となることが大切だと思われる。また、地域と共に生きる宣教共同体を目指し、困難にある人々を支援し、地域に開かれ、交わりを深めていく努力をしていきたい。

以上

世界代表司教会議（シノドス）第 16 回通常総会に向けてのアンケート
- 「交わりとしての教会をめざして」 歩んできた横浜教区の 20 余年を振り返って -

(p.は司牧書簡『交わりとしての教会をめざして』のページ数、質問票は改訂版 A)

1. 交わりの諸次元はどの程度深まってきたか?(質問票 1~4 も考慮して)

1) 諸教会の交わり(pp.6-7)

①外国籍信徒の交わり

Q1. 外国籍の信徒、そして外国語コミュニティとの交わりはどのように変化してきたでしょうか。それらの方々が、教会の一員として典礼やその他の教会活動に参加できるようになってきているでしょうか。

A1. 外国籍コミュニティとの交わりは良くなってきています。外国籍の人も教会委員会のメンバーの一員となり、教会活動に参加できるようになっています。

②エキュメニズムの促進（質問票 7）

Q2. キリスト教の他教派の教会との交わりは深まってきたでしょうか。それぞれの地域において、カトリック以外のキリスト教会と祈りや活動を共にする機会が大切にされてきたでしょうか。

A2. キリスト教の他教派の教会との交わりは深まっているとは、思いません。コロナ禍の影響もあり、カトリック以外のキリスト教会と祈りや活動を共にする機会がありません。

2) 聖職位階の交わり(pp.8-9)

Q3. 司祭団は交わりと協働を持って、聖職者中心主義、小教区中心主義からの脱却を図ってきましたか。

A3. 横浜教区は「聖職者中心主義」から脱却し、すべての信者、すなわち信徒・修道者・司祭の三者が交わりのうちに協力して働く「共同宣教司牧」を目指していると思います。

3) すべての信者の交わり(pp.9-15、質問票 5, 6, 8, 9)

a) 共同宣教司牧について

<横浜教区は「聖職者中心主義」から脱却し、すべての信者、すなわち信徒・修道者・司祭の三者が交わりのうちに協力して働く「共同宣教司牧」を目指してきました。>

Q4. この 20 年以上にわたる歩みの中で、信徒・修道者・司祭の交わりは深まってきたでしょうか。そして、この三者が協働して神の国の実現を目指すという意識は高まってきたでしょうか。

A4. この 20 年以上にわたる歩みの中で、信徒・修道者・司祭の交わりは深まってきたと思います。この三者が協働して神の国の実現を目指すという意識は高まってきていると思います。

b) 「地区共同宣教司牧委員会」と「三部門」について

<共同宣教司牧を推進するため、また「小教区中心主義」からの脱却を目指して、横浜教区では 16 あるすべての地区に「地区共同宣教司牧委員会」が置かれ、また教会にとって欠かせない三つの使命を果たしていくために各地区に「三部門」が設置されました。>

第七地区では「地区共同宣教司牧委員会」と「三部門」が設立されています。

2019 年 10 月 6 日に第七地区「地区懇談会」を相模原教会にて開催。

梅村司教様、教区宣教司牧評議会（立川様、名執様）をお迎えして、「地区

共同宣教司牧委員会」と「三部門」の設立に向けての話し合いがもたれた。2020年2月2日に「第七地区宣教司牧委員会・準備会」を相模原教会にて開催。各教会での3部門の担当委員を選出し、LINE連絡網を準備した。2020年9月6日に「第七地区宣教司牧委員会」を相模原教会にて開催予定。コロナ禍のため各教会から集まることが困難となり、無期限延期となった。その後は集まりが開催されぬまま各教会の、主任司祭、教会委員長、三部門の担当委員が順次交代し、再開が難しい状態となっている。

Q5. これまでの地区共同宣教司牧委員会の歩みを通して、小教区中心主義を乗り越えられてきたでしょうか。「地区」として共に歩む意識は深まってきたでしょうか。

A5. 地区共同宣教司牧員会が設立されておらず、まだ歩み初めていません。

Q6. 三部門の営みによって、社会に向けて「祈る力」「信仰を伝える力」「神の愛を証しする力」は育ってきたでしょうか。祈り、伝え、証しする使命を神からいただいて派遣されているという意識は深まってきたでしょうか。

A6. 3部門とは何か聞いたことがない信徒が圧倒的。「第七地区宣教司牧委員会」を設置して各小教区に3部門とはとの広報活動から始める必要があると思います。

2. 交わりとしての教会をめざして、今後何が求められるか。(質問票 10)

教会の中において：

既に多国籍、他人種、多文化と、日本人中心に進める活動は成り立たなくなっている状態です。これまでの日本人から発信するやり方では十分なコミュニケーションがとれず、互いにうまく超えられない壁があると思います。日本人においては「自分たちの教会」ではなく「ここで参加するみんなの教会」という意識への転換、日本人以外においては「教会のルールを理解し、それに則り(=郷に入れば郷に従え)、一員として一緒に(教会を)育てていく」を意識して活動していく必要があると思います。

教会の外において：

教会はその地域を構成する住民/組織の一員であり、属する信徒もその地域の一員であることを意識していかなければいけないと思います。地域には独自のルールがあり、教会及び信徒もそれに従う必要があります、また地域の活動に協力することも必要と思います。信徒全員が地域を構成する一員であることを自覚し、ともに歩むことが出来るようになることが必要と思います。

また、自分の住む地域においても同じように感心をもって関わって頂きたいと思っています。それが教会の一員としての役割ではないでしょうか。

以上

1. 交わりの諸次元はどの程度深まってきたか? (質問票 1~4 も考慮して)

1) 諸教会の交わり (pp.6-7)

①外国籍信徒の交わり

Q1.外国籍の信徒、そして外国語コミュニティとの交わりはどのように変化してきたでしょうか。それらの方々が、教会の一員として典礼やその他の教会活動に参加できるようになってきているでしょうか。

今現在、典礼については、外国籍の信徒が典礼部のみに参加しています。また、教会掃除については全員で行っていますが、外国籍の信徒は特に積極的に参加しています。

②エキュメニズムの促進 (質問票 7)

Q2.キリスト教の他教派の教会との交わりは深まってきたでしょうか。それぞれの地域において、カトリック以外のキリスト教会と祈りや活動を共にする機会が大切にされてきたでしょうか。

毎年一月に相模原市内の他教派の教会と合同一致祈祷会を開催しており、参加しています。

2) 聖職位階の交わり (pp.8-9)

Q3.司祭団は交わりと協働を持って、聖職者中心主義、小教区中心主義からの脱却を図ってきましたか。

教会委員会において全ての事項について決定しています。

3) すべての信者の交わり (pp.9-15、質問票 5, 6, 8, 9)

a) 共同宣教司牧について

＜横浜教区は「聖職者中心主義」から脱却し、すべての信者、すなわち信徒・修道者・司祭の三者が交わりのうちに協力して働く「共同宣教司牧」を目指してきました。＞

Q4.この20年以上にわたる歩みの中で、信徒・修道者・司祭の交わりは深まってきたでしょうか。そして、この三者が協働して神の国の実現を目指すという意識は高まってきたでしょうか。

コロナ禍以前は三者協働が活発であったが、コロナ禍によってその機会が減少する傾向があります。

b)「地区共同宣教司牧委員会」と「三部門」について

＜共同宣教司牧を推進するため、また「小教区中心主義」からの脱却を目指して、横浜教区では16あるすべての地区に「地区共同宣教司牧委員会」が置かれ、また教会にとって欠かせない三つの使命を果たしていくために各地区に「三部門」が設置されました。＞

Q5.これまでの地区共同宣教司牧委員会の歩みを通して、小教区中心主義を乗り越えられてきたでしょうか。「地区」として共に歩む意識は深まってきたでしょうか。

少し深まっていると思います。

Q6.三部門の営みによって、社会に向けて「祈る力」「信仰を伝える力」「神の愛を証しする力」は育ってきたでしょうか。祈り、伝え、証しする使命を神からいただいて派遣されているという意識は深まってきたでしょうか。

すでに育ち、深まっていると思います。

2. 交わりとしての教会をめざして、今後何が求められるか。（質問票10）

・外国籍信徒との交流について下記のように考えています。

- 1) ミサに参加しやすいようにミサ式次第の各国語版充実（改訂も含む）
- 2) 教会活動の中で、何らかな役割を勤めていただくようにする。

世界代表司教会議（シノドス）第16回通常総会に向けてのアンケート ー「交わりとしての教会をめざして」歩んできた横浜教区の20余年を振り返ってー

（p.は司牧書簡『交わりとしての教会をめざして』のページ数、質問票は改訂版A）

1. 交わりの諸次元はどの程度深まってきたか？（質問票1～4も考慮して）

1) 諸教会の交わり（pp.6-7）

①外国籍信徒の交わり

Q1. 外国籍の信徒、そして外国語コミュニティとの交わりはどのように変化してきたでしょうか。それらの方々が、教会の一員として典礼やその他の教会活動に参加できるようになってきているでしょうか。

回答：

過去を振り返ると外国籍信徒がいれば快く受け入れ交わりを持った。ともにイベントを楽しみ典礼の分担など工夫した。現在も同じである小教区が多い。しかし彼らのほとんどが短期滞在であつたり言語の壁があつたりを言い訳にお客様的交わりの交流であることは今も同じである。何が理想なのかがわからなく手探り状態でいまにいたっている。

外国語コミュニティとの交わりについては彼らの中に強力なリーダーがいるとしないのとはお互いの交わりかたに大きなちがひがある。コミュニティは多様性を増してきているが共同体としての進展はあまり見られない。国籍別の塊でしかないとかんじることもある。

②エキュメニズムの促進（質問票7）

Q2. キリスト教の他教派の教会との交わりは深まってきたでしょうか。それぞれの地域において、カトリック以外のキリスト教会と祈りや活動を共にする機会が大切にされてきたでしょうか。

回答：

他教派との交わりについては5小教区のうち3小教区である。

2小教区はクリスマスコンサートを年に1回共におこなう。

その中で世界祈祷日に祈りをともにするのが1小教区。

年に数回市内の各教派のつどいがあるが、司祭のみ参加。

地区として交流をもたことはない。

2) 聖職位階の交わり（pp.8-9）

Q3. 司祭団は交わりと協働を持って、聖職者中心主義、小教区中心主義からの脱却を図ってきましたか。

回答：

司祭間同士の交わりは信徒側からは見えにくい。

共同宣教司牧委員会やそのほかの会議出席時の司祭、修道者、信徒のへだたりは、狭まってきた。各個人によるが、結局聖職者の意見を通そうとする方もいないとはいえない。それが、聖職者中心主義といえるかどうか？

司祭は司祭主導から信徒主導による決定を求めるが長い間聖職者中心主義で過ごしてきた信徒が多い中「いきなり」の印象がつよい。過去から脱却できない信徒側にも問題が多い。

「うちの神父様」でいることから脱却できていない司祭と信徒の言動に触れることもある。

3) すべての信者の交わり (pp.9-15、質問票 5, 6, 8, 9)

a) 共同宣教司牧について

＜横浜教区は「聖職者中心主義」から脱却し、すべての信者、すなわち信徒・修道者・司祭の三者が交わりのうちに協力して働く「共同宣教司牧」を目指してきました。＞

Q4. この20年以上にわたる歩みの中で、信徒・修道者・司祭の交わりは深まってきたでしょうか。そして、この三者が協働して神の国の実現を目指すという意識は高まってきたでしょうか。

回答：

20年前には考えられなかった状況ではある。実のところ、共同宣教司牧が当地区で歩み始めたのは10年位前からかもしれない。会議での発言も三者が忌憚なく？意見交換するのも最近の事である。交わりの第一段階はクリアできているといえるが、会議に参加している信徒とそうでない信徒には温度差がある。

信徒の中には長い間培った聖職者への依存状態から抜け出せないものも多い。司祭は信徒のその部分を強力に後押し（育成）することもなく、ただ、依存から切り離そうとしているだけにうつる。神の国の実現より自分の希望を実現する事への意識が強いのか？

まだまだ道は遠い。

b) 「地区共同宣教司牧委員会」と「三部門」について

＜共同宣教司牧を推進するため、また「小教区中心主義」からの脱却を目指して、横浜教区では16あるすべての地区に「地区共同宣教司牧委員会」が置かれ、また教会にとって欠かせない三つの使命を果たしていくために各地区に「三部門」が設置されました。＞

Q5. これまでの地区共同宣教司牧委員会の歩みを通して、小教区中心主義を乗り越えられてきたでしょうか。「地区」として共に歩む意識は深まってきたでしょうか。

回答：

地区5教会の公式ホームページ立ち上げ運営、
5教会のミサ司式司祭のローテーション作成会議の立ち上げ、
毎月の5教会共通の共同祈願作成、
広報誌、ホームページ巻頭言の執筆を3者によるローテーション化する、
集会祭儀導入を地区全体としてとりくむ。
それらのことから、地区として共に歩む意識のあらわれといえよう。
まだまだ意識の深まりとまでは言えない状態ではあるが。

Q6. 三部門の営みによって、社会に向けて「祈る力」「信仰を伝える力」「神の愛を証しする力」は育ってきたでしょうか。祈り、伝え、証しする使命を神からいただいて派遣されているという意識は深まってきたでしょうか。

回答：

各部門では研修開催によりその力を育てようとしている。しかし、その会への参加者はほぼ同じ顔ぶれである。委員も同じ者が何期も続けざるをえない状況がある。

多くの信徒は自分の信仰のための祈り、自分と神とのつながりに重点を置いている印象がある。活動の諸々をなべて信徒一般へ浸透を図る手段として「教会たより」「ミサ後のお知らせ」「ホームページ掲載」など駆使しているが結果は見えない。

3部門の目的は私たちの日常の中に息づいているものと考えますが活動へ結びつかないのはなぜだろうか。3部門の営みをより深めることに時間が必要な現状であり派遣されている意識までにはいたっていない。

静清地区

2. 交わりとしての教会をめざして、今後何が求められるか。(質問票 10)

回答：

「少子高齢化社会」「信徒数の減少」「司祭不在の教会」などの課題を地区全体で真剣に見据えていくことが必要。

当地区では宣教司牧委員会の諮問委員会として「これからを考える会」を昨年たちあげた。今のみを刹那的にとらえていては建設的ではない。

しかし、今足元をよく見据えることも同じように必要。

具体的には

信徒同志は仲良しグループの集いであってはならないことの認識を持つ。

教会を支えてくれた高齢者の支援、

各部門への参加者を多くするための模索、

入管の問題の学習会、

司祭の交代も7年前後でお願いしたい。

地区内のカトリック施設との交わり

他教派との交わりと、ともに祈る事の実践

ネット社会への対応

などなどまとめきれないほどの意見が出た。

以上

横浜教区シノドスアンケートへの回答（志太榛原地区）

志太榛原地区共同宣教司牧委員会
推進担当司祭 牧山 善彦
委員長 大手 利公

世界代表司教会議（シノドス）第16回通常総会に向けてのアンケート ー「交わりとしての教会をめざして」歩んできた横浜教区の20余年を振り返ってー

（p.は司牧書簡『交わりとしての教会をめざして』のページ数、質問票は改訂版A）

1. 交わりの諸次元はどの程度深まってきたか？（質問票1～4も考慮して）

1) 諸教会の交わり（pp.6-7）

①外国籍信徒の交わり

Q1. 外国籍の信徒、そして外国語コミュニティとの交わりはどのように変化してきたでしょうか。それらの方々が、教会の一員として典礼やその他の教会活動に参加できるようになってきているのでしょうか。

小教区単位で見ると、多くの小教区で外国籍あるいは外国にルーツやつながりを持つ信徒の典礼や行事への参加や協働（朗読、共同祈願、聖歌隊、季節的な信心業の先導、典礼準備や祭壇花・クリスマスの馬小屋などの装飾）が見られる。また、コロナ禍以前より日本での生活上の様々な困難（経済的困窮、各種手続き、葬儀、精神面のケアなど）に対するサポートや支援のための邦人信徒のはたらきも見られる。教会学校や秘跡（洗礼・初聖体・堅信）の準備は、邦人家族と外国籍あるいは外国にルーツやつながりを持つ家族の子どもたちの垣根なく受け入れ、一緒に歩み続けている。ただし秘跡を受けた後のミサへの参加率が激減することも指摘されている。

他方、地区単位での外国籍あるいは外国にルーツやつながりを持つ信徒との交わりは乏しく、個別の小教区、あるいは各言語の信徒同士での小教区を越えた交わりに留まっていると思われる。

②エキュメニズムの促進（質問票7）

Q2. キリスト教の他教派の教会との交わりは深まってきたでしょうか。それぞれの地域において、カトリック以外のキリスト教会と祈りや活動を共にする機会が大切にされてきたでしょうか。

限られた機会ではあるが、一致祈禱集会の開催や、教派を越えて相互の活動に参加する取り組みは行われている。ただ、参加するメンバーが固定化していることもあり、小教区あるいは地区全体として他教派との接点や理解、交わりが広がっているとは言い難い。

2) 聖職位階の交わり（pp.8-9）

Q3. 司祭団は交わりと協働を持って、聖職者中心主義、小教区中心主義からの脱却を図ってきましたか。

20余年のすべての期間で司祭団が交わりと協働を持って、聖職者中心主義、小教区中心主義からの脱却を図ってきたとは言い難い。少しずつ脱却に向けて歩み始めている兆しはあるが、『横浜教区における改革の基本方針』にあるように「何よりも司祭の回心、司祭の意識の変革を図らなければならない」（p.3）と思われる。

3) すべての信者の交わり (pp.9-15、質問票 5, 6, 8, 9)

a) 共同宣教司牧について

＜横浜教区は「聖職者中心主義」から脱却し、すべての信者、すなわち信徒・修道者・司祭の三者が交わりのうちに協力して働く「共同宣教司牧」を目指してきました。＞

Q4. この 20 年以上にわたる歩みの中で、信徒・修道者・司祭の交わりは深まってきたでしょうか。そして、この三者が協働して神の国の実現を目指すという意識は高まってきたでしょうか。

多少なりとも三者の交わり、その中でも信徒同士、あるいは信徒と修道者の交わりは深まってきたはいるが、十分とはいえない。また、協働して神の国の実現を目指すという意識、あるいは共同宣教司牧への意識が高まってきたともいえない。

要因のひとつとして、聖職者中心主義が乗り越えられていない現実があるように思われる。特に聖職者同士の交わりや理解、あるいは協力が不十分な場合、容易に共同宣教司牧の歩みが足踏みや後退を起こしてしまい得る。他方、そこには信徒の側にも協働宣教司牧や信徒使徒職への意識が育ってきていない現実も垣間見える。

b) 「地区共同宣教司牧委員会」と「三部門」について

＜共同宣教司牧を推進するため、また「小教区中心主義」からの脱却を目指して、横浜教区では 16 あるすべての地区に「地区共同宣教司牧委員会」が置かれ、また教会にとって欠かせない三つの使命を果たしていくために各地区に「三部門」が設置されました。＞

Q5. これまでの地区共同宣教司牧委員会の歩みを通して、小教区中心主義を乗り越えられてきたでしょうか。「地区」として共に歩む意識は深まってきたでしょうか。

少しずつ地区という意識が深まり始めているが、萌芽であり、これまでの地区共同宣教司牧委員会の歩みを通して小教区中心主義を乗り越えられてきたとは言えない。また、志太榛原地区共同体という意識が各小教区の共同体や信徒それぞれに浸透しているともいえない。

コロナ禍でのミサの中止・再開の地区全体での意志決定の統一、地区共同宣教司牧委員会主催の地区黙想会の開催、主日ミサでの司式司祭交換、巻頭言への地区内の司祭・修道者・各小教区信徒の持ち回りによる執筆の開始など、少しずつ見える形での地区全体に関わる取り組みが始まっている。しかし、地区として共に歩む意識の深まりには、まだまだ時間と労力が必要である。

Q6. 三部門の営みによって、社会に向けて「祈る力」「信仰を伝える力」「神の愛を証しする力」は育ってきたでしょうか。祈り、伝え、証しする使命を神からいただいて派遣されているという意識は深まってきたでしょうか。

地区として明確な三部門の営みに乏しいところはあるが、個々の信徒においては多少なりと育ち、意識の深まりを感じるころはあると思われる。とりわけ災害などの有事や思いがけない事態のなかで、募金や支援といった他者に向かう取り組みが生まれたり、ともに祈る意識や活動が生まれたりするなかで、祈り、伝え、証しする使命を果たす意識の醸成を感じることもある。

それゆえ、三部門についての理解を深めるため、まずは自分たちが祈り、伝え、証しする使命について理解し、分かち合い、生活のなかに落とし込むための地区主催の取り組み（定期的な黙想会、共同宣教司牧についての分かち合いなど）を始めたところである。

2. 交わりとしての教会をめざして、今後何が求められるか。(質問票 10)

教会共同体内においては「交わりとしての教会をめざす」意識や理解、「そのための共同宣教司牧」への意識や理解を、特定の信徒に留まらず多くの方々が自らのものとするのが求められる。広く多くの信徒が交わりを生き、行える機会を模索していくことが必要。信仰を深めるための定期的な黙想会を昨年度より開始し、共同宣教司牧についての分かち合いを今後進めていくが、これらの大きな活動だけでなく日々の生活のなかでキリストに親しみ、交わりとしての教会を生きることが大切になると思われる。(殊に邦人信徒を考えると) 少子高齢化が進んでいるなかで、布教教化、宣教活動への取り組みも今後さらに求められていくことも考えられる。

また、教会内の交わりに留まることなく、地域共同体という意味における「地区」のなかで生きる教会として、地域社会との交わりも重要となる。地域・近隣の人々と出会い、関わり、謙虚に耳を傾けることを通じて、かえって交わりとしての教会とその使命を生きることにつながるであろうと思われる。

以上

静岡県西部地区

世界代表司教会議（シノドス）第16回通常総会に向けてのアンケート ―「交わりとしての教会をめざして」歩んできた横浜教区の20余年を振り返って―

（p.は司牧書簡『交わりとしての教会をめざして』のページ数、質問票は改訂版A）

1. 交わりの諸次元はどの程度深まってきたか？（質問票1～4も考慮して）

1) 諸教会の交わり（pp.6-7）

①外国籍信徒の交わり

Q1. 外国籍の信徒、そして外国語コミュニティとの交わりはどのように変化してきたでしょうか。それらの方々が、教会の一員として典礼やその他の教会活動に参加できるようになってきているでしょうか。

■外国籍の信徒、そして外国語コミュニティとの交わりはどのように変化してきたか

●外国籍信徒の増減

静岡県西部地区では、日本の高度成長期に地元企業が外国人労働者の雇用を促進したため外国籍市民が増加し、フィリピンをはじめとした外国籍信徒が浜松教会などのミサに参加するようになりました。また、三方原教会では、およそ40年前にベトナム難民信徒が共同体へ加わったところから、外国籍信徒との深い交わりが始まりました。

1990年に難民入管法が改正されると、ブラジル国籍やペルー国籍の日系人が静岡県西部地区に居住するようになりました。日系人は浜松市などで急増したことに伴い、1993年には日系ブラジル人司祭が来日し、浜松教会などでポルトガル語ミサが行われるようになりました。ブラジル国籍の信徒はその後も増え続け、2008年ごろには浜松教会のポルトガル語ミサに1回で約350人が集まることもありましたが、リーマンショックの影響で多くの信徒が帰国し、新型コロナウイルス感染症の流行前は150人ほどで推移していました。

また、2017年には技能実習法が施行され、翌年から浜松市などでベトナム国籍の技能実習生が増え始めました。同年に浜松教会で始まったベトナム語ミサの参加者には技能実習生や留学生が多く、新型コロナの流行前には100人以上が与っていました。

●外国語コミュニティの形成

浜松市に住むようになった外国籍信徒の多くは、まず浜松教会のミサに参加し、外国語コミュニティをつくりました。1994年には浜松教会が市街地から郊外へ移転しましたが、ポルトガル語ミサが行われたのは市街地の公民館や高校のチャペルなどでした。教会でミサを行わなかったことについて、つまびらかな事情はわかりませんが、当時を知る人によれば、短期の出稼ぎを目的に来日し、小教区への帰属意識が希薄な人が多かったことも理由の1つであったようです。浜松教会のブラジルコミュニティという形が整ったのは、2003年に浜松教会でポルトガル語ミサが始まってからでした。

浜松教会のミサには1990年以前からフィリピン国籍の信徒が参加していましたが、フィ

リピン共同体が正式に始まったのは 2000 年のことでした。また、2006 年、浜松教会にスペイン語を話し南米の文化や習慣に精通した主任司祭が着任し、2009 年にはブラジル以外の南米出身者をメンバーとするラテン共同体が発足しました。

一方、居住地や職場近辺の教会として、浜松教会から鷺の宮教会に移った外国籍信徒もいました。その殆どが、フィリピン人とペルー人の家族で、親族同士が近隣に住むことも多い特徴があります。彼らは同じ国出身者同士での親しい交流を持ちつつ、独立したコミュニティを作ることより、家族のため、特に子どもたちのために日本人共同体への融合を選んだため、各言語のコミュニティを作りませんでした。出身国を同じくする者同士の信仰上の交わりは、ミラグロスやサントニーニョなどの信心業の際に、浜松教会や磐田教会のコミュニティに参加して育んでいます。

●交わりの変化 ～リーダーたちとの交わり、教会委員会への参加

各国語コミュニティのリーダーたちの交わりは、根付いてきています。外国籍信徒が教会委員会で役職を務めている例もあります。例えば、三方原教会では現在、教会委員会の副委員長をベトナム籍信徒が担い、典礼担当、営繕担当、教会学校スタッフなどにもベトナム籍、ペルー籍信徒が関わるなど、1 つの共同体として交わっています。

浜松教会では 2007 年から各国語コミュニティのリーダーたちが教会委員を務めています。委員たちは言語を越えた 1 つの共同体としての交わりが深まるよう、情報の共有に努め、時には新たな活動などを提案しています。ただ、言葉による意思疎通には限界があるため、日本語力の高い人しか参加できない議論に時間を割くよりも、典礼での役割分担や行事日程の確認などを丁寧に行うようにしています。

●交わりの変化 ～秘跡を望む外国籍家族の成長

外国籍家族の努力や成長、秘跡を望む姿勢が交わりを変化させることがあります。例えば、鷺の宮共同体での交わりの変遷は、外国籍信徒の家族の成長と増加、特に各自の努力による日本語の獲得と、子供たちの成長に因る秘跡：洗礼・初聖体・堅信を通して共同体に自主的に交わり、それに対して日本人も様々な方法で応えてきたことによって起こりました。

■それらの方々が、教会の一員として典礼やその他の教会活動に参加できるようになってきたか

外国籍信徒が、教会の一員として典礼やその他の教会活動に参加できるようになってきています。上述のように外国籍信徒も秘跡を通して共同体の一員となっているため、典礼や教会活動への参加（ミサ前の準備など）は当然のこととして成され、外国の信心業や食などを通じての融合も進んでいます。

また、各国語コミュニティの信徒が典礼の奉仕に参加する機会を広げる取り組みとして、国際ミサがあります。浜松教会が 2007 年から月 1 回程度行っている国際ミサでは、各国語による朗読や聖歌を取り入れています。また、ポルトガル語ミサ、ベトナム語ミサなどの外国語ミサも各教会で行われています。ただ、自国語のミサだけに来ている人たちの場合、他

の信徒たちとの関わりが薄くなる傾向があります。

愛の証をなす活動にも、外国語コミュニティ・日本語コミュニティの枠を越えて信徒が参加しています。1994年に始まったグループ・エスペランサは毎週土曜日に JR 浜松駅周辺で炊き出しをする活動で、中心となっているのは浜松教会のブラジルコミュニティ信徒ですが、当初から他のコミュニティも主体的に関わってきました。

②エキュメニズムの促進（質問票 7）

Q2. キリスト教の他教派の教会との交わりは深まってきたでしょうか。それぞれの地域において、カトリック以外のキリスト教会と祈りや活動を共にする機会が大切にされてきたでしょうか。

浜松市内にあるキリスト教の他教派の教会には、毎年3月第1金曜日の「世界祈祷日」に教派を越えて集会を開く教会もあり、浜松教会も新型コロナの流行前は参加していました。磐田地区にあるカトリックを含む4つの教会も毎年、平和祈祷集会により、他教派と意見交換の機会を得てきました。

一方、静岡県西部地区の他の教会では、小教区共同体としてエキュメニカルな取組みの機会はなく、積極的な交わりは持てていません。ただ、ブラジル籍などのカトリック以外のキリスト教徒が教会で祈りたいと来訪される機会がたびたびあり、信徒が迎え入れるように対応しています。

2) 聖職位階の交わり (pp.8-9)

Q3. 司祭団は交わりと協働を持って、聖職者中心主義、小教区中心主義からの脱却を図ってきましたか。

個人の意識の差はあるものの、総じて司祭団との交わりと協働、そして聖職者中心主義、小教区中心主義からの脱却は図られてきています。例えば、信仰教育や社会での奉仕活動は教会委員会が主として計画するほか、決定事項は教会委員会で協議し、決定します。その際、主任司祭の意向を尊重し、信徒側の意見も主張し、良い関係性の中で進んでいると思います。

聖職者中心主義、小教区中心主義からの脱却が進んでいる背景には、時代の変遷や、個人の意識の変化があり、そして何より司祭団からの働きかけが大きいでしょう。

3) すべての信者の交わり (pp.9-15、質問票 5, 6, 8, 9)

a) 共同宣教司牧について

＜横浜教区は「聖職者中心主義」から脱却し、すべての信者、すなわち信徒・修道者・司祭の三者が交わりのうちに協力して働く「共同宣教司牧」を目指してきました。＞

Q4. この20年以上にわたる歩みの中で、信徒・修道者・司祭の交わりは深まってきたでしょうか。そして、この三者が協働して神の国の実現を目指すという意識は高まってきたでしょうか。

■信徒・修道者・司祭の交わりは深まってきたか

信徒と司祭の交わりは表面的にはその時々司祭のタレントに大きく影響されます。また、交わりには様々な程度があるため、深まってきたかどうかについて一概に答えられない面もあります。交わりの程度を考えると、①挨拶をする②日常の話をする③個人的レベルの話をする④霊的な話をする…などの捉え方が可能です。そのため、一概に「交わっている」との回答を引き出す事はできませんが、①②に於いては、信徒が通常司祭に求めていることであり、現在、それは個人的な捉え方の差異はあるものの満たされています。但し、③に至っては、個人の求める状態に応じて起こりうることでありましょう。特に④は、主任司祭が小教区に求める姿勢と、小教区共同体の霊的成長と欲求が合致しない限り起こり得ないことであると言えます。

また、信徒と修道者の交わりは、ともに信仰教育を担当することなどを通して深まってきました。

■三者が協働して神の国の実現を目指すという意識は高まってきたか

三者には協働によって神の国の実現を目指していきたいという意識は常に存在しています。三者が「顔と顔を合わせる」という機会を得て、神の国の実現への意識が芽生え、常に高まってきました。

ただ、その機会を得る者は、教会委員長や三部門の担当者などの役を持つものに限られ、また共同宣教司牧という“場”に限られていることが現状です。さらに、意識を高めていく、積み上げていくことはとても努力が求められ、聖霊の働きを祈る毎日です。

また、司祭が交代すると、教会委員会で決めた信徒間の役割などが変わってしまうため、信徒がすべて司祭に頼ってしまうこともあります。

b) 「地区共同宣教司牧委員会」と「三部門」について

<共同宣教司牧を推進するため、また「小教区中心主義」からの脱却を目指して、横浜教区では16あるすべての地区に「地区共同宣教司牧委員会」が置かれ、また教会にとって欠かせない三つの使命を果たしていくために各地区に「三部門」が設置されました。>

Q5. これまでの地区共同宣教司牧委員会の歩みを通して、小教区中心主義を乗り越えられてきたのでしょうか。「地区」として共に歩む意識は深まってきたのでしょうか。

サマーキャンプや合同の研修会などで、地区としての交流と意識は高まってきました。特に教会委員会メンバー間では、「地区」として共に歩む意識が共有されています。西部地区共同宣教司牧委員会で各小教区の情報交換が行われ共有できることは有り難いと思います。

しかし、コロナ禍で地区としての活動休止を余儀なくされていることもあり、共同体信徒への展開が深まっているとは言い難い状況であると思われます。地区として一堂に会し、地区を再認識し、地区として歩む意識を、三者が聖霊の働きに願う場が必要になると感じます。

Q6. 三部門の営みによって、社会に向けて「祈る力」「信仰を伝える力」「神の愛を証しする力」は育ってきたのでしょうか。祈り、伝え、証しする使命を

神からいただいて派遣されているという意識は深まってきたでしょうか。

■三部門の営みによって、社会に向けて「祈る力」「信仰を伝える力」「神の愛を証しする力」は育ってきたか

三部門への関わり方は人によって差があるものの、少しずつ、「この活動はこの部門では」とイメージできるようになってきています。共同宣教司牧委員会に設置された三部門に何らかの形で関わった者には、大きな変化が起こり、「使命を神からいただいて派遣されている」という意識が確実に深まっています。

ただ、三部門に分かれてそれぞれの地区の信徒と交流しても、教会委員会やお知らせの場、信徒大会などで活動報告をする程度にとどまってしまう教会もあります。

また、三部門の意識が信徒全員に浸透していないという意見や、三部門で何か成果を挙げなければならないと捉えられてしまっているとの指摘もあります。

信徒数が多くない共同体では三部門にこだわらず、テーマをもって共同体が同じ使命（共通理解）のもとに前に進み実践につなげていく方法もあるのではないかと思います。

2. 交わりとしての教会をめざして、今後何が求められるか。（質問票 10）

静岡県西部地区では外国籍が多い地域性の中で、活動の範囲が教会内だけでなく外へと広がり、交わる機会を持つという良さが発揮されています。

問題を挙げるとすれば、交わりとしての教会をめざすことを意識している信徒と、していない信徒の格差があることです。

その点、今回世界の教会に投げかけられた 10 項目のアンケートと横浜教区のシノドスアンケートは、分かち合いの好機となりました。この分かち合いは、今まで向き合えないでいたことに向かう大きな一歩になったと感じます。そして、これを機に、みことばに因って分かち合い、話し合い、理解し合い、互いに向き合える教会を目指したいと考えます。

また、司祭、信徒がそれぞれ主の教えに従順に愛をもって接し合い、信仰を深めていくことも大切です。人間誰しも感情を持ち、その時々のお気持ちにより信徒は「教会」という枠組みではなく、自らの感情において「教会」の事柄を判断し、司牧の問題が、特に小教区において振り回されることもあります。一人一人が愛の教えであるカトリックの精神に立ち返り、努めて相互を理解しあい、思いやりを深めていくことが何よりも求められます。

交わりとしての教会をめざすためには、信徒のカテケシスの必要性も常に感じます。さらに進んで、教皇庁や司教書簡などについても触れる機会を委員会、三部門が積極的に設け、特に信徒がそれらをよく学び、理解し、地区で助け合いながら信仰を深めていくことが求められます。

情報を得る手段が乏しいと、人は無関心になりがちです。そのため、人との対話や、教会内は勿論日本の社会、世界の動き、自然界全てに関心を持つよう心がけることも大切でしょう。一人ひとりが成長していくことは、結果的に正しい判断や識別につながり、教会の成長につながると考えます。

2022 年 4 月 8 日

長野・篠ノ井教会 主任司祭 濱田欧太郎

世界代表司教会議（シノドス）第 16 回通常総会に向けてのアンケートへの回答

Q1 当地区では特に意識するでもなく外国籍信徒の受け入れを行ってきたように思う。

フィリピン人信徒は自分たちのネットワークを持ち、自分たちコミュニティをつくりあげ、積極的にイベントを企画し、日本人信徒を自分たちのイベントに招待する。ブラジル人信徒たちが自分たちで 1 泊 2 日の黙想会を行いたいと願い出て来た時は、教会の施設を彼女たちのために開放した。ベトナム人信徒たちが大挙教会に来るようになった時は、複数の日本人信徒が自発的に日本語教室を開いた。また外国人支援のために県民文化部国際課と連携し、同課が必要とする人材を教会の中から紹介した。

司祭による幼児性虐待やハラスメントで教会のネガティブな面が浮上するようになっているが、外国人の受け入れについて言えば、カトリック教会は日本社会の最先端に位置していたように思う。

他方、外国籍信徒を教会の諸活動に誘ってはいるが、彼ら彼女らの教会への帰属意識は希薄で、教会の諸活動に積極的に参加しようとする姿勢を、ごく少数の者を除いては、みることはできない。教会は彼にとって拠り所かもしれないが、自らが支え手であるという意識はほとんどないように見受けられる。

Q2 地方の教会にあっては、他教派・他教団の司祭や牧師であっても、保育園や幼稚園の運営を始め兼務兼職を重ねている者が多く、仕事量の多さに気力・体力がついていかないというのが実情である。そのような立場にある若い牧師や司祭の疲弊が目につく。他教派・他教団の教会には外国籍の司祭や牧師が派遣されてくることがあるが、彼らは日本のキリスト教会にあって司牧者が圧倒的に不足しているという現実を理解できていない。そのため、なにかとイベント（小規模なコンサートが多い）を打ちたがるが、それをもって他教派の教会との交わりということが出来るかは疑問である。

個人的には、イベントなどを行うのではなく、懇親会のような形でもいいから（大がかりな準備を必要としない形で）他教派・他教団の人々を語り合いたいという気持ちは強い。もっとも過去にこのような提案をしても、それがイベントの実施に替えられてしまったという経緯がある。

他教派・他教団との係りは、イベントを行うことではなく、話し合うことから始めてみたい。

Q3 当地区にあっては、20 年近く前から小教区を越えて地区としてのまとまりがみられた。そのため、小教区中心主義からは脱却できていたように思う。

聖職者中心主義からの司祭団の脱却は難しいと感じている。司祭の多くは小教区の中でセレブリティや芸能人のように振舞っているし、信徒が行う諸活動の中に降りてく

ることはなく、教会に対する評論家にとどまっているようにみえる。

現況では、聖職者中心主義から脱却しようとしている司祭が、旧来の司祭職にとどまっている司祭たちと信徒との間に入り、全てを動かしていくという形をとらざるを得ないように思う。

Q4,5,6 当地区では地区共同宣教司牧委員会の活動を通して、様々な次元における交わりが深まってきていたように思う。とりわけ、信徒が教区のヴィジョンも理解して、小教区レベルを超えて地区レベルで宣教と司牧を考え、自らが宣教者であり、後継者を育成しようという意識が高まってきたように思う。

(東信)

世界代表司教会議（シノドス）第16回通常総会に向けてのアンケート ー「交わりとしての教会をめざして」歩んできた横浜教区の20余年を振り返ってー

(p.は司牧書簡『交わりとしての教会をめざして』のページ数、質問票は改訂版A)

1. 交わりの諸次元はどの程度深まってきたか?(質問票1~4も考慮して)

1) 諸教会の交わり(pp.6-7)

①外国籍信徒の交わり

Q1. 外国籍の信徒、そして外国語コミュニティとの交わりはどのように変化してきたでしょうか。それらの方々が、教会の一員として典礼やその他の教会活動に参加できるようになってきているのでしょうか。

①の回答

「ことば・文化の違いの壁」をどのように、克服するかが「変化」にあらわれていた。

1990年代~2008年

具体的に、日本の教会の司教教書、外国籍信徒の為の教区の委員会の司祭、多国籍する流れが強くなってきたときの主任司祭の働きかけで、まずは子供たちの洗礼、初聖体から始まり、日本人信徒の有志による日本語学校も始められた。日多言語ミサも始められた。生活支援のための、食料品、日常生活品の寄付も行われた。

2009~現在

教会委員会に、外国籍コミュニティの代表が入るようになる。たくさんの幼児洗礼があり、初聖体もあったが、あの子供たちは、どこへ行ってしまったのか?クリスマスには、失われた第二世代、第三世代が猛者に参与して、教会聖堂はあふれるが。

② エキュメニズムの促進 (質問票7)

Q2. キリスト教の他教派の教会との交わりは深まってきたでしょうか。それぞれの地域において、カトリック以外のキリスト教会と祈りや活動を共にする機会が大切にされてきたでしょうか。

②の回答

コロナのため、エキュメニズム担当の方々が集まれず、メールにても回答がなく、返答できない。ただ一つ、ここ15年くらいは、小教区エリアのキリスト教会の女性による祈祷集会は、続けられ、そのための準備としての、集いも行われている。

2) 聖職位階の交わり(pp.8-9)

Q3. 司祭団は交わりと協働を持って、聖職者中心主義、小教区中心主義からの脱却を図ってきましたか。

主日のミサ以外は、黙想会、地区共同宣教委員会の開催、小教区を超えた信徒の話し合いなどは、非常に活発であり、小教区中心主義は克服されている。コロナ禍になり、今は閉ざされている。

3) すべての信者の交わり(pp.9-15、質問票5, 6, 8, 9)

a) 共同宣教司牧について

<横浜教区は「聖職者中心主義」から脱却し、すべての信者、すなわち信徒・修道者・司祭の三者が交わりのうちに協力して働く「共同宣教司牧」を目指してきました。>

Q4. この20年以上にわたる歩みの中で、信徒・修道者・司祭の交わりは深まってきたでしょうか。そして、この三者が協働して神の国の実現を目指すという意識は高まってきたでしょうか。

(東信)

b) 「地区共同宣教司牧委員会」と「三部門」について

＜共同宣教司牧を推進するため、また「小教区中心主義」からの脱却を目指して、横浜教区では 16 あるすべての地区に「地区共同宣教司牧委員会」が置かれ、また教会にとって欠かせない三つの使命を果たしていくために各地区に「三部門」が設置されました。＞

Q5. これまでの地区共同宣教司牧委員会の歩みを通して、小教区中心主義を乗り越えられてきたでしょうか。「地区」として共に歩む意識は深まってきたでしょうか。

Q6. 三部門の営みによって、社会に向けて「祈る力」「信仰を伝える力」「神の愛を証しする力」は育ってきたでしょうか。祈り、伝え、証しする使命を神からいただいて派遣されているという意識は深まってきたでしょうか。

3 の a・b の回答

軽井沢教会の回答をもって、この回答といたします。

2. 交わりとしての教会をめざして、今後何が求められるか。(質問票 10)

コロナ禍で 多くの方に声を求めたが、PC メールでの回答もえられず。

世界代表司教会議（シノドス）第 16 回通常総会に向けてのアンケート
—「交わりとしての教会をめざして」歩んできた横浜教区の 20 余年を振り返って—

（p.は司牧書簡『交わりとしての教会をめざして』のページ数、質問票は改訂版 A）

南信地区回答案

回答を質問の間に挿入してあります。（➡矢印の箇所）

長野県 南信地区

＜3 小教区、司祭団 2 名、女子修道院 2（ご聖体の宣教クララ修道院・カルメル会泰阜修道院）
関連幼稚園 3＞

1. 交わりの諸次元はどの程度深まってきたか？（質問票 1～4 も考慮して）

1) 諸教会の交わり（pp.6-7）

①外国籍信徒の交わり

Q1. 外国籍の信徒、そして外国語コミュニティとの交わりはどのように変化してきたでしょうか。それらの方々が、教会の一員として典礼やその他の教会活動に参加できるようになってきているでしょうか。

➡○教会活動は共に行っている。外国籍の人達がいないと活動が成り立たない状態。バザーなど

○教会委員会メンバーにも参加している。そろそろ教会委員長になってもらっても良いのでは という案も上がってきている。

○教会学校のリーダーにもなってもらっている。

（外国籍信徒の子弟が多いという事情もある）

○外国籍の方がいないと教会がなりたたなくなってきた。

○聖堂掃除のローテーションにも組み込まれている。

○一方で日本人信徒の力が弱くなってきていると感じる。

（少数化と高齢化）

②エキュメニズムの促進（質問票 7）

Q2. キリスト教の他教派の教会との交わりは深まってきたでしょうか。それぞれの地域において、カトリック以外のキリスト教会と祈りや活動を共にする機会が大切にされてきたでしょうか。

➡南信地区では交わりはない。

2) 聖職位階の交わり（pp.8-9）

Q3. 司祭団は交わりと協働を持って、聖職者中心主義、小教区中心主義からの脱却を図ってきましたか。

➡共同宣教司牧を進めている中で司祭団内の交わり、小教区中心主義からの脱却が図られてきている。

（福音宣教委員会の時代から、共同宣教司牧の考えが浸透していた。）

3) すべての信者の交わり（pp.9-15、質問票 5, 6, 8, 9）

a) 共同宣教司牧について

＜横浜教区は「聖職者中心主義」から脱却し、すべての信者、すなわち信徒・修道者・司祭の三者が交わりのうちに協力して働く「共同宣教司牧」を目指してきました。＞

Q4. この 20 年以上にわたる歩みの中で、信徒・修道者・司祭の交わりは深まってきたでしょうか。そして、この三者が協働して神の国の実現を目指

すという意識は高まってきたでしょうか。

➡三小教区どこも信徒数が減少し、高齢化もすすんでいるため、一小教区だけでの活動が難しくなっており、自ずと地区としてのまとまりができています。

南信地区共同宣教司牧委員会の存在と働きの力が大きいと感ずる。

b) 「地区共同宣教司牧委員会」と「三部門」について

＜共同宣教司牧を推進するため、また「小教区中心主義」からの脱却を目指して、横浜教区では16あるすべての地区に「地区共同宣教司牧委員会」が置かれ、また教会にとって欠かせない三つの使命を果たしていくために各地区に「三部門」が設置されました。＞

Q5. これまでの地区共同宣教司牧委員会の歩みを通して、小教区中心主義を乗り越えられてきたでしょうか。「地区」として共に歩む意識は深まってきたでしょうか。

➡前項に記した通り、地区共同宣教司牧委員会は機能している。

小教区中心主義はもとより存在していなかった。(所属教会を愛し、「お祝い日には自分の教会でミサに与りたい」という気持ちは別の意識)

Q6. 三部門の営みによって、社会に向けて「祈る力」「信仰を伝える力」「神の愛を証しする力」は育ってきたでしょうか。祈り、伝え、証しする使命を神からいただいて派遣されているという意識は深まってきたでしょうか。

➡人材が少なく、三部門への人員を割けないのが現状。

三部門の理念：「祈り」「伝える」「証しする」は意識して実践されていると思われる。典礼・養成などには奉仕者が任命されているのでそれぞれの活動の中で、三部門の精神は実践されているものと考えている。

集会祭儀のための葉を作り、日本語の読めない人向けにローマ字を併記したり、教会学校のやり方を独自に工夫したりして、祈る力・伝える力を養って来ている。

又、各自は居住地区の様々な組織の活動に参加しており、その働きの中で証しすることは自然と行われていると思われる。

又、「祈り」「伝える」「証する」の意識は地区のビジョン作りの基本理念ともなっている。(別紙 地区ビジョン 添付)

2. 交わりとしての教会をめざして、今後何が求められるか。(質問票 10)

➡○今まで繋いできた地区内の交わりをさらに深めていく。

地区の特色(持ち味)を生かした活動をしていく。

○代表者だけが集まる教区全体の懇談会より、県単位でなるべく多くの信徒・司祭・修道者が集まれる集会があれば県内信者の交わりを深めることができるのではないかな。

○県単位で研修会が開ければ多くの人が参加できる。できれば教区の養成担当の方が来てくれるとありがたい。

○南信地区としては(あるいは地方の教会全般か?)信徒の高齢化・人口減少が大きな問題となっている。維持費としての月定献金も減少するであろうから、将来的に教会の施設維持ができていくか不安が多い。

一教会だけでは解決できないことで、教会が存在するその地域の行政の問題でもある。

以上

世界代表司教会議（シノドス）第16回通常総会に向けてのアンケート

－「交わりとしての教会をめざして」歩んできた横浜教区の20余年を振り返って－ （山梨地区）

1. 交わりの諸次元はどの程度深まってきたか？

1) 諸教会の交わり

①外国籍信徒の交わり（Q1）

- ・全員とは言えないが、一部、特に定住型の外国籍の方には教会活動、典礼奉仕に参加する人が増えてきた。
- ・ロザリオの祈りや十字架の道行き、子どもの信仰教育等を国籍関係なく実施するようになった。
- ・コロナ禍でブロック別ミサとなった小教区では、同一ブロックの外国籍の方との交わりが深まった。
- ・小教区によっては、外国籍窓口を設置し、サポートを行っている。
- ・課題は、言葉の壁があげられた。相互の努力が必要であり、重要な決定事項や教会だより等を外国籍の人にも分かるように伝える努力をしてほしいとの希望がだされた。

②エキュメニズムの促進（Q2）

- ・教派を越えた教会一致懇談会の活動に参加しており、教会一致祈祷週間、県民クリスマスのほか世界祈祷日にも共に取り組んでいる。
- ・聖公会との交わりをもっている。
- ・甲府教会発の地域の福祉活動（ダルク支援会、ライフサポート、こどもサポート）や、甲府教会の聖歌隊の練習にプロテスタントの方が加わっている。
- ・地区内でも、小教区によって、取り組みの状況がわかれている。

2) 聖職位階の交わり（Q3）

- ・司祭と話しながら、ともに働いており、協働できているのではないかな。
- ・聖職者中心主義、小教区主義からの脱却は徐々にではあるが図られてきている。
- ・コロナ禍以前は、司祭巡回も行われていたが、今は中止となっている。再開できる時を心待ちにしている。
- ・教会の中心である弱く小さくされた人々と共に救いの恵みにあずかるために司教、司祭の霊的指導のもと、どのように連携し、関り、行動するかを、ともに、考えていくことの大切を感じる。
- ・外国籍信徒が外国籍司祭に頼るあまり、主任司祭の立場を尊重しない問題が少なからずあった。

3) すべての信者の交わり

a) 共同宣教司牧について（Q4）

- ・三者の交わりは始まり、深まりつつある。以前は司祭、修道者に依存していたことを信徒もともに、担うようになってきている。
- ・「共同宣教司牧」の言葉は広まったが、内容理解と意識の高まりはまだ不十分。

b) 「地区共同宣教司牧委員会」と「三部門」について

Q5.

- ・「地区」の意識は地区共同宣教司牧委員会のメンバーには定着しつつあるように見えるが、一般信徒への浸透はまだ不十分。
- ・コロナ禍以前は、地区としての研修会を実施し、よい学びと交わりが出来ていたが、休止の今は、地区という意識が薄れてきている。今後の期待として、地区としての研修会などを通して交流していきたい。
- ・外国籍の中には小教区を越えて、合同で研修会、ミサ、懇談会をするグループも出てきた。
- ・「小教区中心主義」を乗り越えるのはなかなか難しい。

Q6.

- ・小さな歩みであり、十分ではないが深まっているのではないか。
- ・「三部門」の用語は聞きなれてきたが、教会にとって欠かせない3つの使命を果たしていくための三部門だということの理解はまだ不十分。
- ・社会に向けてとなると難しく感じる。
- ・祈り、伝え、証する使命を神様から頂いて派遣されているという意識をもっと深めたい。
- ・何か活動するときに、祈り、愛を証し、信仰を伝えることは不可欠なので、三部門の連携と他部門の養成に参加できる仕組みづくりが大切。
- ・まあまあできていると思う人が多いが、どうしたらよいのか、個人で満足してはいけないのか、生き生きとして、祈り、伝え、証しする力は、どこに潜んでいるのか、「力」という言葉のインパクトが強く、まぶしいという感想も出された。

2. 交わりとしての教会をめざして、今後何が求められるか。

- ・教会内の交わりができずに社会との交わりはできない。教会外の人が教会に来た時に、信徒の関係を見て暖かさを感じるように努めたい。
- ・小さな交わりを深めながら、地区、教区、諸次元の交わりを深めていくこと。
- ・自分の信仰を自分の言葉で表現できるような信徒の養成が必要。
- ・小教区、地区での奉仕、行事や交流に、教会の信徒として、積極的に協力する意識、姿勢。積極的に参加することで、共同宣教司牧への理解を深め、意識の改革を図る。
- ・共同体運営を日本人中心から、様々な国籍の信徒で行っていく方法への変革が必要。
- ・外国籍信徒との交わり。
- ・一人一人に会いに来てくださる神様の姿に倣い、一部の信徒だけではなく全ての信徒への意思疎通を目指す、変えていかなくてはならないことには丁寧に向き合っていく姿勢、わかりやすく伝える心がけ、諦めることのない姿勢が必要。
- ・信徒でない一般の大人、こどもが参加出来る学びや、機会を持つ、開かれた教会の姿。